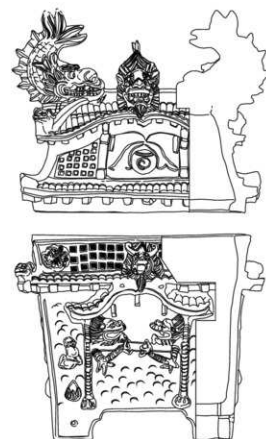
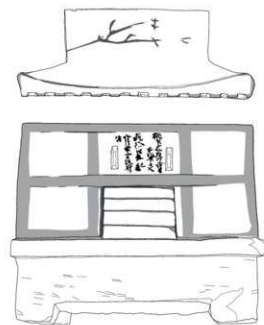


野嵩上後原古墓群

平成 26 年度 野嵩第一公園整備事業に伴う緊急発掘調査



2017年(平成29年)2月
沖縄県 宜野湾市教育委員会

野嵩上後原古墓群

平成 26 年度 野嵩第一公園整備事業に伴う緊急発掘調査

2017 年(平成29年) 2 月
沖縄県 宜野湾市教育委員会

序

本報告書は、宜野湾市建設部都市計画課が計画する野嵩第一公園整備事業に係る開発工事に先立ち、平成 26 年度～平成 27 年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した野嵩上後原古墓群の緊急発掘調査および測量・記録保存調査の成果をまとめたものであります。

今回、発掘調査が行われた野嵩上後原古墓群は、今から約 250 年前の近世期～戦後に位置づけられる遺跡であり、野嵩地域の墓域でもあります。また、近世期より造られた古墓も時の流れとともにその形が移り変わっていくことも少なくありませんが、本古墓群が形成された当該丘陵はこれまで大きな土地変等がなされず、今日に至るまで丘陵斜面部に良好な形で掘込墓が残されておりました。

今回の調査において、古墓の分布状況や型式等を把握することができたことにより、古墓群が野嵩地域における歴史の一端を物語る貴重な遺産であるといえます。

今回の発掘調査の成果が市民の歴史的教材及び文化財保護・活用資料として広く活かされ、また野嵩地域や宜野湾市及び近隣地域の歴史研究の学術的資料としてご検討頂ければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、調査を実施するにあたりご協力を賜りました関係各位に対して深く感謝の意を表します。

2017（平成 29）年 2 月

沖縄県 宜野湾市教育委員会
教育長 知 念 春 美



巻頭図版2 67号墓墓室内人骨出土状況（北から）



巻頭図版3 74号墓検出状況（西から）

例 言

1. 本報告書は、野嵩第一公園整備事業に係る開発行為に伴い、宜野湾市教育委員会が建設部都市計画課より執行依頼を受けて、平成 26 年度に実施した野嵩上後原古墓群の緊急発掘調査の成果を収録したものである。
2. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図（1:2,500）を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを主に使用している。
3. 本書で使用した土色は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。
4. 本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第 X V 座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高（那覇）を基準とした高さである。
5. 本書の編集は、杉村千重美の協力を得て長濱健起が行った。
第 1 章～第 IV 章 …………… 長濱健起・池原悠貴
6. 現地調査で得られた実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録は、全て宜野湾市教育委員会文化課に保管している。

凡例 1

1 墓型式

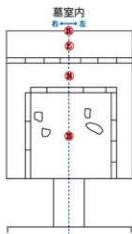
分類	墓型式	特徴	代表例/市内例	模式図
I	a ゴツバカ 洞穴墓	自然洞穴を利用する墓。 洞穴開口部を石積みによって塞ぐものを「洞穴隠込墓」と呼ぶ。	・久米島町ヤツチのガマ ・宜野湾市喜友名山川原丘陵古墓群 フツキヤブ洞窟	
	b 岩陰墓	自然の岩陰を利用する墓。 岩陰前面を石積みによって塞ぐものを「岩陰隠込墓」と呼ぶ。	・浦添市伊祖の高御墓 ・宜野湾市喜友名名原第一古墓群 岩陰A・D	
II	a フィンチャー 隠込墓 (正面装飾なし)	斜面や岩盤を削り込んだ墓。 概ね、石積みや漆喰で入口が塞がれるのみで、正面は装飾されない。ただし、屋根を構築するものや、例外的に正面のみを亀甲墓状に飾るものもある。	・宜野湾市小嶺墓 ・宜野湾市奥間ノロ墓	
	b ファーワー 破風墓	正面を装飾した隠込墓で、屋根が破風形(切妻形)になるもの。 墓の背面が露出するものもある。	・那覇市玉陵 ・糸満市幸地復門中墓	
	c ヒラフアバキ 平葺墓	正面を装飾した隠込墓で、平屋根を構築するもの。 扉石は直線状。	・浦添市伊祖の入り御拝願墓 ・浦添市内間西原近世墓群1号墓	
	d カニメノコ 亀甲墓	正面を装飾した隠込墓で、屋根が亀甲形になるもの。平地に建てられるものもある。 袖回りが省略されて、亀甲の盛り上がりが増強されるものを「ボージーバカ」と呼ぶ。	・那覇市銘苅古墓群 「伊是名御嶺内の墓」 ・宜野湾市大山東方第V丘陵古墓群 「大山上江家古墓」	
III	a ヤマトバキ 家形墓	平地に建てられた墓で、外観が家の形を呈するもの。 屋根は概ね破風形(切妻形)であるが、中には亀甲形のものや塔を建てるものがある。	—	
	b ヨリハコ 仮墓	平地に建てられた簡易的な墓。 概ね小型で、市販のものや構築されたものがある。中にはやや大きなものもあり、「箱形墓」と呼称されるものもある。	—	

『宇地治西原丘陵古墓群』(城間・伊藤編2008)より転載

2 亀甲墓の部位名称

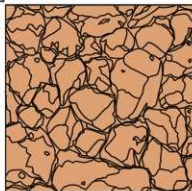


宜野湾市史編集委員会編「1985『宜野湾市史』第5巻 資料編4 参考



- 墓室内
敷→土
- ① 御善が石
 - ② 門石
 - ③ 礎石
 - ④ 縮隔石
 - ⑤ 門石
 - ⑥ 礎石
 - ⑦ 礎
 - ⑧ 白
 - ⑨ 子白
 - ⑩ ヌンチャ
 - ⑪ ボージ
 - ⑫ 礎の手
 - ⑬ 袖回り
 - ⑭ 袖石
 - ⑮ 庭積み
 - ⑯ 庭敷い
 - ⑰ 三味台
 - ⑱ カビアンジ
 - ⑲ 墓誌
 - ⑳ 墓の門
 - ㉑ 仮墓
 - ㉒ 墓道*
 - ㉓ シルヒラン*
 - ㉔ 一番壇*
 - ㉕ 二番壇*
 - ㉖ イケ
- *本欄では、Cの物とする

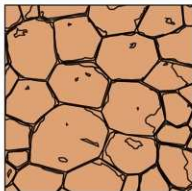
3 石積み技法



野面積み



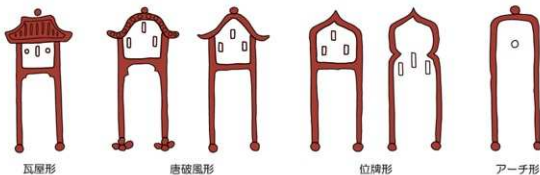
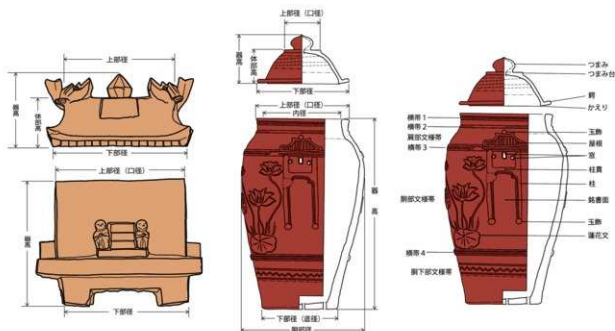
布積み



相方積み

凡例 2

- ・厨子の分類は、基本的には上江洲均（上江洲 1982）・浦添市教育委員会（浦添市教育委員会 1999、2006）に倣った。
- ・厨子番号は墓室内に安置されている状況において、墓口左側より時計回りに任意の番号を付すのを基本とした。
- ・諸般の事情により、実測が出来なかった遺物などに関しては、オルソ画像や写真を用いている。
- ・遺物の集計表や実測図などは紙幅の都合上、割愛したものもある。
- ・計測単位は遺物によって異なり、観察表右上に単位を示した。
- ・各厨子の計測位置および部位名称は以下のとおりである。



屋門の分類

目次

序	
巻頭図版	
例言	
凡例 1. 2	
第Ⅰ章 事業概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第Ⅱ章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3節 野嵩の位置と環境	6
第Ⅲ章 調査成果	9
第1節 調査の経過	9
第2節 調査の概要	9
1. 基本層序	9
2. 遺構	10
3. 遺物	32
i) 厨子(蔵骨器)	32
ii) その他の遺物	32
第Ⅳ章 結語	69
参考・引用文献	70
報告書抄録	

巻頭図版

巻頭図版1	報告書所収調査地位置
巻頭図版2	67号墓室内人骨出土状況（北から）
巻頭図版3	74号墓検出状況（西から）

挿図目次

第Ⅱ-1図	宜野湾市と野嵩の位置	3	第Ⅲ-10図	50号墓	20
第Ⅱ-2図	宜野湾市の地質図	4	第Ⅲ-11図	50号墓	21
第Ⅱ-3図	宜野湾市地形分類図	5	第Ⅲ-12図	34号墓	22
第Ⅱ-4図	野嵩上後原古墓群の位置と周辺の文化財	6	第Ⅲ-13図	厨子（蔵骨器）1	42
第Ⅱ-5図	昭和20年航空写真と地形図	7	第Ⅲ-14図	厨子（蔵骨器）2	44
第Ⅲ-1図	調査区全体図（遺構図）	11	第Ⅲ-15図	厨子（蔵骨器）3	46
第Ⅲ-2図	67号墓	12	第Ⅲ-16図	厨子（蔵骨器）4	48
第Ⅲ-3図	31号墓	13	第Ⅲ-17図	厨子（蔵骨器）5	50
第Ⅲ-4図	74号墓	14	第Ⅲ-18図	厨子（蔵骨器）6	52
第Ⅲ-5図	74号墓	15	第Ⅲ-19図	厨子（蔵骨器）7	50
第Ⅲ-6図	67号墓	16	第Ⅲ-20図	銭貨1	60
第Ⅲ-7図	27号墓	17	第Ⅲ-21図	銭貨2	62
第Ⅲ-8図	52号墓	18	第Ⅲ-22図	被葬者各構成割合	64
第Ⅲ-9図	52号墓	19			

図版目次

図版Ⅱ-1	野嵩区南方を横切る丘陵地 （野嵩上後原古墓群 北西より）	7	図版Ⅲ-10	厨子（蔵骨器）1	43
図版Ⅱ-2	ズディバナピラ（野嵩石畳道）	8	図版Ⅲ-11	厨子（蔵骨器）2	45
図版Ⅱ-3	野嵩上後原古墓群遠景（南西より）	8	図版Ⅲ-12	厨子（蔵骨器）3	47
図版Ⅲ-1	検出状況1	23	図版Ⅲ-13	厨子（蔵骨器）4	49
図版Ⅲ-2	検出状況2	24	図版Ⅲ-14	厨子（蔵骨器）5	51
図版Ⅲ-3	検出状況3	25	図版Ⅲ-15	厨子（蔵骨器）6	53
図版Ⅲ-4	遺物出土状況1	26	図版Ⅲ-16	厨子（蔵骨器）7	55
図版Ⅲ-5	遺物出土状況2	27	図版Ⅲ-17	陶磁器1	56
図版Ⅲ-6	遺物出土状況3	28	図版Ⅲ-18	陶磁器2	57
図版Ⅲ-7	完掘状況1	29	図版Ⅲ-19	陶磁器3	58
図版Ⅲ-8	完掘状況2	30	図版Ⅲ-20	上：土器 下：煙管・簪・金属製品	59
図版Ⅲ-9	完掘状況3	31	図版Ⅲ-21	銭貨1	61
			図版Ⅲ-22	銭貨2	63

挿表目次

第Ⅲ-1表	遺構観察表	10	第Ⅲ-5-2表	本土産陶磁器集計表	40
第Ⅲ-2-1表	厨子観察表1	33	第Ⅲ-5-3表	中国産陶磁器集計表	40
第Ⅲ-2-2表	厨子観察表1	34	第Ⅲ-5-4表	沖縄産無釉陶器集計表	41
第Ⅲ-3-1表	その他の遺物観察表1	35	第Ⅲ-5-5表	土器集計表	41
第Ⅲ-3-2表	その他の遺物観察表1	36	第Ⅲ-5-6表	アカムヌー集計表	41
第Ⅲ-3-3表	その他の遺物観察表3	37	第Ⅲ-6-1表	推定被葬者数1	65
第Ⅲ-3-4表	その他の遺物観察表4	38	第Ⅲ-6-2表	推定被葬者数2	66
第Ⅲ-3-5表	その他の遺物観察表（銭貨）	38	第Ⅲ-6-3表	推定被葬者数3	67
第Ⅲ-4表	厨子集計表	39	第Ⅲ-6-4表	推定被葬者数4	68
第Ⅲ-5-1表	沖縄産施釉陶器集計表	40			

第 I 章 事業概要

第 1 節 調査に至る経緯

野嵩上後原古墓群は、野嵩区に所在する墓域として知られており、『宜野湾市史』第 1 巻にも掲載されている周知の埋蔵文化財包蔵地である。近世以降に丘陵斜面地に形成された掘込墓が多く確認され、一部は現代（本土復帰前後）になっても使用されていた。

野嵩上後原古墓群が所在する野嵩第一公園の整備事業が計画され、平成 25 年度に当該地一帯(約 2000 ㎡)の埋蔵文化財の有無照会がなされた。それに伴い、市教育委員会は、当該地一帯に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨の回答をし、市建設部都市計画課とその埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、今後の基礎資料とするための地形測量及び分布調査等を実施することで理解を得た。

平成 26 年度に実施した地形測量図 (S=1/500) の作成及び分布調査により、残存する多くの古墓が掘込墓であること、複数の古墓の中に厨子等が安置されていることなどが確認された。これらの結果に基づき、市教育委員会は市建設部都市計画課に対し、文化財保護法に基づく埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の必要性を説明し、法定された所定の手続き等について伝えた。その後、市建設部都市計画課と協議をし、当該地一帯で確認された古墓のうち、土地改変の計画がなされている約 2000 ㎡の範囲に含まれる古墓の緊急発掘調査を実施した。

第 2 節 調査体制

野嵩第一公園整備事業に伴う野嵩上後原古墓群の埋蔵文化財緊急発掘調査は平成 26 年度に実施し、資料整理及び報告書作成に係る整理業務は平成 27、28 年度に実施した。その調査体制は下記のとおりである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会			
事業責任者	教育長		玉城 勝秀 (平成 26～27 年度) 知念 春美 (平成 28 年度)	
事業総括	教育部	教育部長	宮城 光徳 (平成 26 年度)	
	"	"	島袋 清松 (平成 27～28 年度)	
	"	教育次長	島袋 清松 (平成 26 年度)	
	"	"	伊佐 英明 (平成 27～28 年度)	
	文化課	課 長	與那原 類 (平成 26～27 年度) 比嘉 洋 (平成 28 年度)	
事業事務	"	文化財保護係長	森田 直哉 (平成 26 年度)	
	"	"	吉村 純 (平成 27～28 年度)	
	"	文化財保護係主任主事	長濱 健起 (平成 28 年度)	
	"	"	仲村 毅 (平成 28 年度)	
	"	"	主事	伊藤 圭 (平成 26 年度)
	"	"	"	長濱 健起 (平成 26～27 年度)
	"	"	"	仲村 毅 (平成 26～27 年度)
調査業務	"	文化財保護係長	森田 直哉 (平成 26 年度)	
	"	"	主事	長濱 健起 (平成 26 年度)

	文化課	文化財保護係長主事	仲村 毅 (平成 26 年度)
資料整理業務	〃	文化財保護係主任主事	長濱 健起 (平成 28 年度)
	〃	〃 主事	長濱 健起 (平成 27 年度)

委託業務

平成 26 年度	発掘調査支援業務委託 (株)文化財サービス 沖縄営業所
平成 27 年度	出土資料整理業務委託 (株)文化財サービス 沖縄営業所

調査指導および調査協力 (職名等は現在)

調査指導及び調査協力として下記の方々に指導・協力をいただいた。

新城 清子 (野嵩 2 区自治会長)
 田場 直樹 (沖縄県教育庁文化財課 記念物班 指導主事)
 比嘉 悦子 (沖縄県立芸術大学 非常勤講師) 宜野湾市文化財保護審議会 会長
 池田 榮史 (琉球大学法文学部 教授) 宜野湾市文化財保護審議会 副会長
 赤嶺 政信 (琉球大学法文学部 教授) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 新垣 義夫 (普天満宮司) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 大城 逸朗 (おきなわ石の会 会長) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 恩河 尚 (沖縄国際大学 非常勤講師) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 崎浜 靖 (沖縄国際大学経済学部 教授) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 嵩元 政秀 (沖縄考古学会 元会長) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 波平エリ子 (沖縄国際大学 非常勤講師) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 福島 駿介 (琉球大学工学部 名誉教授) 宜野湾市文化財保護審議会 委員
 宮城 邦治 (沖縄国際大学法文学部 名誉教授)
 平敷 兼哉 (宜野湾市立博物館)
 仲村 健 (宜野湾市立博物館)
 池原 悠貴 (宜野湾市教育委員会 文化課)
 屋比久千江美 (宜野湾市教育委員会 文化課)
 古謝 和美 (宜野湾市教育委員会 元文化課)
 西銘 五月 (宜野湾市教育委員会 元文化課)
 宜野湾市役所建設部都市計画課
 宜野湾市役所建設部用地課

第Ⅱ章 位置と環境

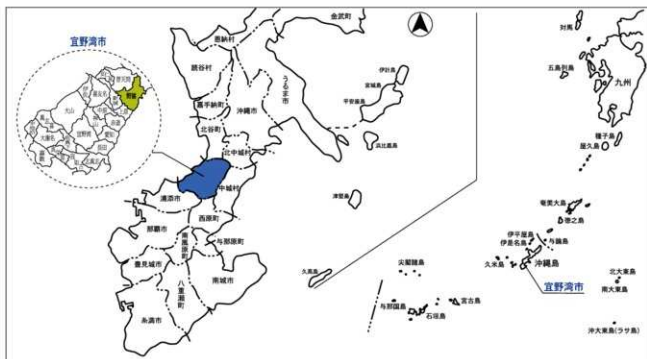
第1節 地理的環境

宜野湾市は、沖縄本島中部にあり、那覇市の北方約12kmの地点に位置している。北は北谷町、北東は北中城村、東は中城村、東南には西原町、南は浦添市が隣接し、西側は東シナ海に面している。市域の総面積は、約19.80km²(2014年度現在)で、東西に約6km、南北に約5kmの略長方形を呈している。市の北側にはキャンプ瑞慶覧基地、中央には普天間飛行場が占有することから市民の居住地はその周縁部に展開している。市全域に占める基地面積の割合は約32.4%(2012年現在)となっている。市域には、国道58号線、330号線等のほか、沖縄自動車道北中城IC・西原ICへのアクセス道路として、県道宜野湾北中城線や34号線などの主要幹線道路が縦横に展開し、中南部と北部地域を結ぶ交通の要所となっている。

本市の地層は、泥岩や砂岩から成る新第三紀鳥尻層群を基盤とし、その上に不整合に琉球石灰岩が分布、市域西側海岸沿いの低地には沖積層である砂層が堆積している。市域東側の丘陵地では鳥尻層群が風化してきたジャーガル土壌及び、石灰岩台地上の鳥尻マーヅと呼ばれる土壌が広く分布している。

地形を見ると、海岸から内陸に向かって難壇状の海岸段丘から成り、中段段丘と低位段丘に大別され、それぞれ下位面、上位面に区分する4つの段丘面を有している(宜野湾市史編集委員会編2000)。低位段丘下位面(第1面)は、比屋良川河口から宇地泊、真志喜、大山、伊佐に連なる標高3~30mの海岸低地である。低位上位面は(第2面)は、標高30~40mの石灰岩段丘で、大山、真志喜、宇地泊、伊佐の住宅地となっている。中段段丘下位面(第3面)は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高50~90mの石灰岩段丘である。中段段丘上位面(第4面)は、標高90m以上の高地であり、我如古から野嵩に至る国道330号線沿いとなっている。

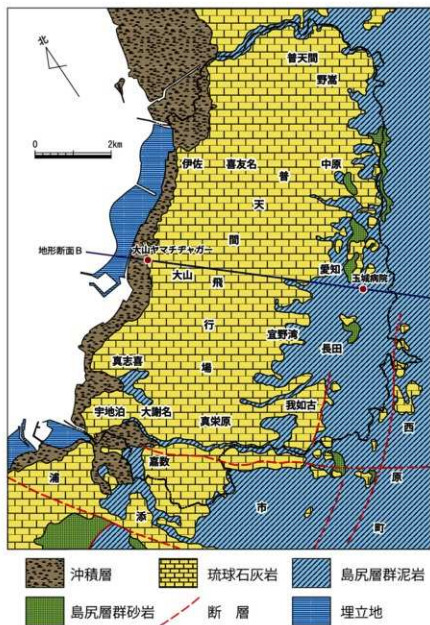
市の北側に普天間川、南側に比屋良川が流れ、段丘面を横断するように発達している。段丘面の境には、



第Ⅱ-1図 宜野湾市と野嵩の位置

比高の異なる段丘崖があり段丘縁辺に洞穴（吸込口）や琉球石灰岩から浸透した雨水が不透水性の島尻層で地下水となって発達し、石灰岩を侵食して多くの鍾乳洞を形成している。これらの地下水は、段丘崖で、島尻層と琉球石灰岩の不整合面から湧きだし、古来より湧泉として人々に利用されてきた。

西普天間住宅地区の所在する地域は、字普天間、字安仁屋、字新城の4つの地区に跨っており、県道81号線に面した中位段丘の縁辺部（標高60m前後）から、海岸低地（標高10m前後）へ至る斜面地となっている。特に喜友名グスクの所在する西側の緑地部分は、急傾斜地となっており、基地接収後からほとんど開発等の影響を受けず、戦前からの地形が良好に保存されている場所である。緑地帯北側の標高14～16mラインには、不透水性の島尻層と透水性の琉球石灰岩との境があり、その不整合面からは地下水が湧きだし、

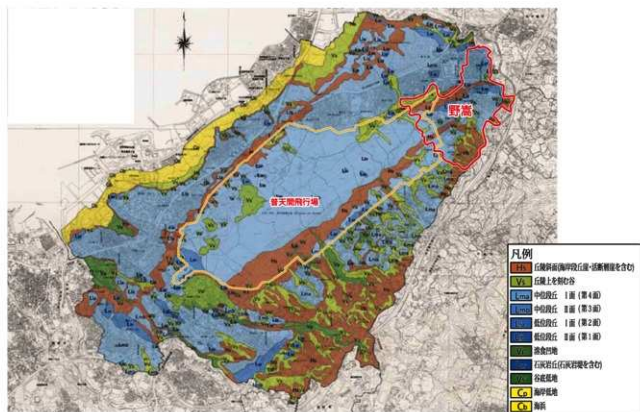


第II-2図 宜野湾市の地質図

多数の湧泉が形成されている。市の国指定文化財である喜友名泉もこれらの湧泉と同じ標高レベルに位置する湧泉であり、宜野湾市の自然地形・地質を象徴する場所と言える。

また、地区南東から北西側に延びるイシジャーは、「河川渓谷状の地形を示し、一部流水も見られ、他の琉球石灰岩地域では見られない、珍しい地形」（宜野湾市教育委員会 2015）であり、地形形成について学術上貴重な地形とされている。特に中流域は両岸が高さ10～14m程の琉球石灰岩の切り立った崖となっており、両崖面には、多数の小洞窟やそれらを利用した掘込墓がある。洞窟天井部には鍾乳石やカーテン（鍾乳洞で形成される水滴のつらら）などが確認されている。これらの存在からイシジャーの形成は、「かつて鍾乳洞の天井が崩れてできたドリーネの可能性が示唆され、河床部の岩塊は落盤した天井部の岩盤の可能性がある。」（宜野湾市教育委員会 2015）

イシジャーを除く地区中央から東側一帯は、戦前から近隣集落の田畑として利用されていた場所であるが、基地接収後に米軍の住宅地として大規模な造成工事によって地形改変がなされている。



第Ⅱ-3図 宜野湾市地形分類図

第2節 歴史的環境

沖縄諸島に人々が住み始めたのは今から3万年程前に遡り、旧石器時代と呼称される時代で宜野湾市においても大山洞穴から「大山洞人」と称される20歳前後の男性の下顎骨が発見されている（高宮ほか1975、鈴木1975）。また、普天満宮洞穴遺跡等では、リュウキュウムカシキョン等のシカ類の化石が多数発見されている（宜野湾市教育委員会1989）。

現在からおよそ6,000年～7,000年前から1,000～800年前までの数千年に及ぶ時代を沖縄貝塚時代と称する狩猟・採集の時代となる。沖縄貝塚時代は、遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・中期・後期に大別されている。前期は市域を含め、沖縄諸島域に当時の土器形式が広く分布していることから、定着的な集団により各地域に遺跡が形成される時期と考えられる。貝塚時代中期は、拠点的な大規模集落が平地に展開し、小規模遺跡がその周縁に点在しており市域では、西側琉球石灰岩地帯で顕著に見られる。後期には、前述の西側琉球石灰岩地帯に加えて、海岸低地の砂地にも居住域が拡散しており、その規模も一律的に大きくなっていくようである（宜野湾市教育委員会1989）。

12世紀から15世紀に及ぶグスク時代は、沖縄において初めて農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘縁の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”の形態がこの時期に形成され始める。生産的農耕社会を基盤とした社会が展開していく中で、農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や制作・同時期に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化したと考えられ、その中から“按司”と称される在地支配者層が出現する。

按司を中心とした各地域の集団は、相互に抗争を繰り返しながら次第に淘汰され、14世紀頃には、中山・山北・山南の3つの小国家が成立する。市の真志喜区に所在する県指定文化財の森の川には、中山の王とし

て1372年に公式に明朝に朝貢した「察度」の出自が記された石碑が残されている。その後、1429年には尚巴志が三山を統一し、琉球王国誕生へと至る。グスク時代から第二尚氏王朝前期の1609年島津侵入までを歴史学では古琉球と称し、中世に相当する。

琉球王国は島津の支配を受けながらも王国としての体裁を保ちつつ、中国（明・清）との交易を行っていた。近世琉球と称される時代である。市域の集落は、碁盤型の集落と屋敷集落が存在していた。この集落形態は、近世に開始され、耕作地を増やすために小規模に点々と存在した集落を一箇所に集め、平地を田畑へと開墾していった。さらに18世紀以降、首里や那覇の土族の移住により屋敷集落が形成されていった。

近代以降は、1872年（明治5）に琉球藩、1879年（明治12）には沖縄県の設置が強行され、1881年（明治14）6月には中頭一帯を管轄する中頭役所が宜野湾間切番所内に併設された（宜野湾市史編集委員会編1985）。その後、中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が相次いで設置されたことにより、市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となった。1902年（明治35）には首里から普天間に至る普天間街道、1922年（大正11）には県営鉄道嘉手名線（軽便鉄道）が開通した。1908年（明治41）の「沖縄県及び島嶼町村制」施行により従来の間切は町・村に、村は字に改められ、宜野湾間切は宜野湾村となった。

1945年（昭和20）4月1日、中部西海岸に上陸した米軍に対する日本軍の前線基地として、本市域も壊滅的な打撃を被り、さらには戦後の軍用地接収と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌することとなった。他地域に比べ僅かに焼失を免れた野嵩地区が住民の収容所の一つとなった。その後、1946年（昭和21）9月以降、故地ないしはその近傍に帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962年（昭和37）7月1日には市に昇格した。

第3節 野嵩の位置と環境

野嵩^{イークラハル}上後原古墓群が所在する野嵩地域は、宜野湾市の北東側に位置し、北側に普天間、西側に新城、南側に上原の各区及び、東側に北中城村字安谷屋や中城村字登又と隣接する。現在の野嵩は、市役所や市民会館などの施設が立地する本市の行政上の中心地である。旧集落は、北側に位置する丘陵を背にして、野嵩原^{イリジマール}、西門原、上後原に形成される。当該古墓群は主に上後原に形成されるが、一部は西門原や安里晶原にも及んでいる。

第1章でも述べたように、本市の地形は4つの海岸段丘が雛壇状に展開する（第1-2図）。野嵩地域は、



第II - 4図 野嵩上後原古墓群の位置と周辺の文化財

主に段丘第3面(中位段丘下位面)に位置しており、当該古墓群は同面上の琉球石灰岩丘陵上に形成され、その標高は約80～100mを測る。

野嵩地域の南西側には、市域の中央を占有する普天間飛行場の東縁から丘陵地が延びており、ここに野嵩上後原古墓群が立地する。現在では公園整備が進められ、土地造成工事などが行われている。この丘陵地の北縁辺部には崖面が形成されており、特に北東側の崖縁は「ヒージャーガーバンタ」と称される。また、ヒージャーガーバンタ南側の丘陵上面は、標高98mほどの平場を形成しており、「チチナガミモー（ジュウゴヤモー）」と称される。ここは、旧暦8月15日に行われる「ウチチウマチー（月祭り）」という祭事に月の出を待つ場所であった。ヒージャーガーバンタの崖縁は、県道35号線拡幅工事により掘削され、旧状を留めていないが、工事前の崖縁は県道側に岩が突出しており、標高は97mを測ったという（宜野湾市教育委員会編1996、2012）。

丘陵地東側の崖面下には普天間川が流れる。ヒージャーガーバンタの崖縁下には琉球石灰岩と島尻層群の不整合面がみられ、「ヒージャーガー」と称される湧泉が形成される。ヒージャーガーは、普天間集落では「イヌカー」と称され、集落のムラガーであり、拝所にもなっていた（宜野湾市教育委員会編1996）。なお、西門原には市指定史跡の野嵩クシヌカーがあり、その南側に位置するメヌカーと同様に石積みで整備されたウブガーで、集落の祭祀や生活用水として利用された（宜野湾市教育委員会編2012）。



図版Ⅱ - 1 野嵩区南方を横切る丘陵地（野嵩上後原古墓群 北西より）



第Ⅱ - 5図 昭和20年航空写真と地形図

野嵩は、1671年の宜野湾間切新設の際に、中城間切から編入された村で、それ以前は「前ふてま」の村名で記されている。旧集落の中心は野嵩原に位置し、この東側に位置するチチナガミモ一南麓には、集落の中央を東西に走るナカミチが通る。この道の東側は比高約34mの急坂となり、ここに石畳が敷設され、現在でも生活道として地域の方に利用されている。この石畳道は、1458年の護佐丸・阿麻和利の乱に敗れた護佐丸の妻子が首里へと逃げる際の逸話の舞台にもなっており、その逸話から「スディバナビラ」と称される。石畳道は保存状態が良好だったこともあり、現在の県道29号線東側部分は1989年3月31日に「野嵩石畳道」として市指定の史跡となった。

ヒージャーガーバンタ西側の丘陵緩斜面地には、ウガンヌカタと呼ばれる旧集落の拝所が所在する。この周辺では、1993年から始まった街路建設に伴う発掘調査によって、縄文時代晩期相当期の竪穴住居と思われる遺構が2基確認されている（宜野湾市教育委員会編1996）。

野嵩上後原古墓群は、ヒージャーガーバンタを形成する丘陵と、野嵩西^{イリムチイバ}表原古墓群が立地する丘陵に挟まれた標高約96mの3つの連なる丘陵上に形成される遺跡である。現在では、東側の丘陵から中央の丘陵にかけて家形墓を中心に新しい墓が建ち並ぶが、丘陵北側の斜面地には亀甲墓や掘込墓などが残る。また、宅地開発によって分断された西側の丘陵でも丘陵裾の斜面に多くの掘込墓が残っている。



図版Ⅱ-2 スディバナビラ（野嵩石畳道）



図版Ⅱ-3 野嵩上後原古墓群遠景（南西より）

第三章 調査成果

第1節 調査の経過

当該古墓群における緊急発掘調査は、野宮第一公園整備に伴う造成工事の予定地に含まれる古墓を調査の対象とし、平成26年12月15日より着手した。現地では、掘削土を置く場所がなかったことから、先に調査及び記録を済ませた地点に掘削土を置くような状況で調査を進めることとなった。調査は、各古墓の墓室と墓庭の軸に沿ってトレンチを設けて下部構造（造成等）を確認したのち、墓庭全面の掘削及び墓口等の検出作業を進めた。古墓に係る遺構の検出後はその状況を記録し、必要に応じて石積み等を除去したのちに墓室内の状況確認を行った。なお、墓庭と思われる一つの空間に複数の墓口が認められる状況等もあったため、墓庭のトレンチを墓口に直行するように設け、各墓庭における区画等の有無やその範囲を確認した。墓庭の掘削作業や墓口の記録作業が済むと墓室内の調査に着手した。墓室内には厨子が残っている古墓も少なからずあったため、墓室内に流入した土砂を取り除いたうえで厨子の配置状況を記録し、厨子の搬出を行った。また、シルヒランに一次葬が残存する古墓も2基見られたため、当該古墓については一次葬の検出、記録、取上げ等を行ったのちに墓室内の調査を開始した。墓室内では、墓口から墓室内奥壁の軸で半裁したのちに土層を確認し、記録作業を行った。

調査は各古墓の記録作業の終了をもって、平成28年3月20日に完了した。なお、対象の古墓は当初予備調査で確認された48基が見込まれていたが、緊急調査によって新たに8基の古墓が確認されたことにより、調査対象の古墓は56基となった。

第2節 調査の概要

1. 基本層序

ほとんどの古墓は丘陵の北側斜面に形成されており、造成方法も大きな違いは認められなかったため、古墓の基本的な造営は近世から近代を通して概ね変わっていないことが想定される。以下に今回の調査で確認された基本層序を記す。

- I a 層：現表土の腐食土層で黒褐色、明赤灰色等を呈す。粘性及び締まりも弱い。破棄された厨子片や沖繩産陶器、銭貨等のほかに現代遺物が含まれる。
- I b 層：墓室内及び墓口周辺で見られる黄褐色土で、古墓の天井部などの崩落土と思われる堆積土層。石灰岩礫等を包含する。
- I c 層：マージ由来の粘質土層で赤褐色を呈す。遺物はほとんど見られない。
- II a 層：褐色や明褐色を呈す。I a 層に比してやや粘性があり、締まりは強い。沖繩産陶器や銭貨などが出土する。
- II b 層：II a 層に比べてやや暗めの色調で粘性は弱い。
- II c 層：粘質で締まりのある土層で赤褐色を呈す。石積み等の前面に堆積する造成土と思われる。
- II d 層：石灰岩の風化層で淡黄色を呈す。墓口周辺や墓室内等で確認される層で、墓室から墓庭に至る範囲で見られる造成土に係るものと考えられる。
- III a 層：石灰岩の風化に由来する砂質土層で黄色を呈する地山。粘性及び締まりも弱い。
- III b 層：丘陵の下段部における地山で、赤褐色のマージと思われる粘土質の土層となる。

2. 遺構

今回の調査で確認した古墓は56基であった。それぞれの古墓は北向き、北北西、北東向きが多く、南向きの古墓は圧倒的に少ない。また、複数基の古墓が連なるように並列して造られ、中には袋状に空間（墓庭）を設けて壁面に複数の墓室を掘り込むパターンも見られた。

個別の古墓に係る状況としては、墓口を石積みやコンクリートブロックによって塞ぐ古墓も見られた。また、今回の調査においては、墓門や「コ」の字形等のタナを有する古墓が少ないことも注目に値することと思われる。以下に、調査において確認された遺構より特徴的な古墓を紹介する。

第Ⅲ-1表 遺構観察表

墓番号	墓口		墓室		観察事項
	法量 (m)	法量 (m)	厨子の有無	タナの有無	
27号墓	高さ 0.56	高さ 1.43	○	×	向きは概ね北西方向。墓室を掘り込んだのち、墓口は石積みにより方形に形成。墓口を塞ぐ蓋石や石積みは見られない。墓室内平面は概ね方形を呈するが、正面奥壁の中央部はやや出窓状に窪む。天井部は平坦に呈するが、左壁は崩落し、隣接する73号墓と繋がる。床面は岩盤削削後に黄色土で平らにし、その上に墓口の石積みがなされる。前面に溝が掘り込まれる。
	幅 0.51	幅 1.32			
	奥行き 0.62	奥行き 1.37			
74号墓	高さ 0.94	高さ 0.92	○	×	向きは概ね西方向。墓口は蓋石（長軸約0.6m、短軸約0.5m）で閉塞する。墓室内平面は概ね隅丸方形を呈する。天井部は平坦に削る。床面は岩盤削削後に造成の土を入れて平坦にし、その上に蓋石を設置する。当該古墓と前述の27号墓の間に73号墓が造られており、この3基古墓の前面に幅広の溝が掘り込まれる。
	幅 0.47	幅 1.44			
	奥行き 0.68	奥行き 1.18			
31号墓	高さ -	高さ 1.21	×	×	向きは概ね北方向。墓口は野面積みで塞ぐ。墓室内平面は略「凸」字状を呈す。天井部は一部崩落するが、残存状況より平坦面とする。墓口付近には黄色土を入れて閉塞の石積みをなしていたと想定される。墓室内には一次葬の人骨1体分が残存し、頭蓋骨は墓室内の概ね西側に位置する。人骨周辺には木柀痕や棺に伴うと考えられる複数の釘が認められている。
	幅 -	幅 1.22			
34号墓	高さ -	高さ 1.49	○	×	向きは概ね北西方向。墓口は野面積みで塞ぐ。墓室内平面は楕円形に近い形態を呈す。天井部は崩落により加工状況は不明。墓室内床面は岩盤削削後に黄色土により平坦面をつくる。
	幅 -	幅 1.27			
67号墓	高さ 1.25	高さ 1.41	○	×	向きは概ね北西方向。墓口は野面積みで完全に塞ぐ。墓室内平面は概ね方形を呈す。天井部は岩盤を概ね平坦に削るが、粗さが残る。床面は墓庭側から緩やかに下るように岩盤を削って平らにする。墓口を塞ぐ石積みは削った岩盤上よりなされている。墓室内には一次葬の人骨1体分が残存し、頭蓋骨は墓室内の概ね北東側に位置する。人骨周辺には木柀痕や棺に伴うと考えられる複数の釘が認められている。当該古墓には明確な墓庭の区画等が見られないものの、墓口の前面に北東-南西軸の石列が確認されているが、性格は把握されていない。
	幅 1.35	幅 1.69			
	奥行き -	奥行き 1.04			
50号墓	高さ 1.23	高さ 1.82	×	○	向きは概ね北方向。墓口は野面積みで塞がれていたが、墓室内に蓋石が倒れていたことから、古墓が崩壊される前は墓口を塞いでいたのは石積みではなく、蓋石だった可能性がある。墓口の床面やサンデーはコンクリートを用いる。墓室内平面は略方形を呈す。天井部は概ね平坦に削ることを意識する。タナは岩盤削削り出しで「コ」の字状に設け、正面奥タナ（高さ約0.34m、幅約3.77m、奥行き約0.9m）は個タナ（左タナ：高さ約0.18m、幅約1.87m、奥行き約0.7m、右タナ：高さ約0.18m、幅約1.68m、奥行き約0.85m）より1段高い。シルヒラシとなる床面は岩盤を丁寧に削って平坦面をつくる。庭園には石積みでなされる。北面の墓門は損壊され現状を留めないが、墓門に伴うと思われる東西軸の石列が見られる。墓庭の北側隅にはコンクリート製の台座が2基あり、現代の脇墓が設置されていたことが窺える。古墓の状況から、公園整備に伴い墓を移転したのちに重積で古墓を崩したことが想定される。今回の調査対象の古墓で最も規模が大きく、比較的新しい時期まで使われていた古墓である。
	幅 0.63	幅 4.65			
	奥行き 0.7	奥行き 3.11			
52号墓	高さ 0.8	高さ 1.84	×	○	向きは概ね北東方向。墓口は切石による石積みで塞ぐ。墓室内平面は歪な三角形を呈す。天井部は岩盤を平らに削るが、粗さが残る。タナ（高さ約0.4m、幅約1.84m、奥行き約0.68m）は岩盤削削り出しにより、正面奥のみ設けられる。シルヒラシとなる床面も岩盤を平坦に削る。古墓正面は布積みで覆われ、墓口も切石を組んで成形する。庭園には高さ約0.9mの石積みによりなされるが、墓門は墓口の軸と合わない。
	幅 0.62	幅 1.45			
	奥行き 0.3	奥行き 1.4			



第Ⅲ - 1 图 調査区全体図(遺構図)

EL=91.000m

EL=90.000m

EL=89.000m

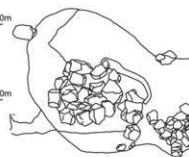


墓室横断面

EL=91.000m

EL=90.000m

EL=89.000m



墓口(石積み)

EL=91.000m

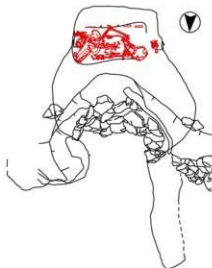
EL=90.000m



EL=91.000m

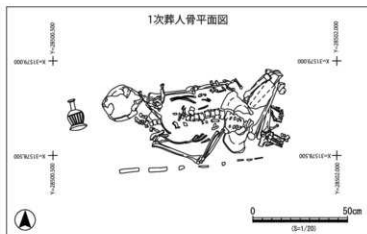
EL=90.000m

EL=89.000m



墓室平面図

1次葬人骨平面図



0 1m (S-1/50)

0 50cm (S-1/25)

EL=95.000m

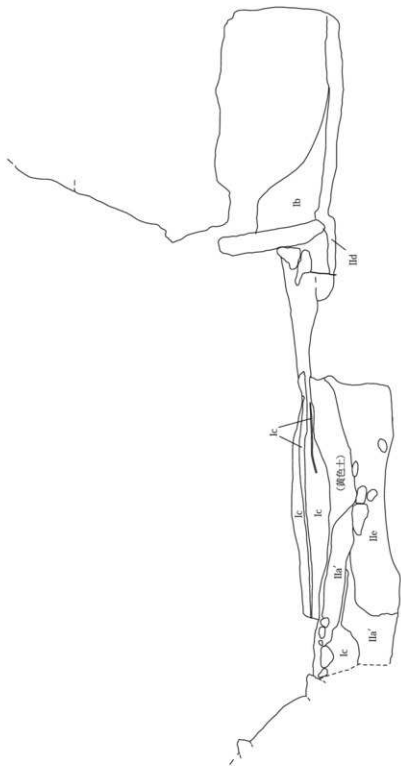
EL=94.000m

EL=93.000m

EL=93.600m



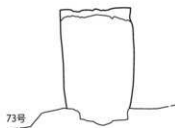
墓室見通し横断面



墓室平面図

0 50cm
①:1/30

EL=93.300m



墓口立面图

Y=28494.000
0003951E°K



墓口平面图

Y=28492.000
0003951E°K

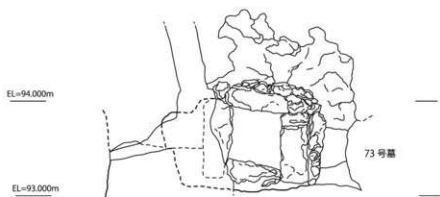
EL=95.000m

EL=94.000m

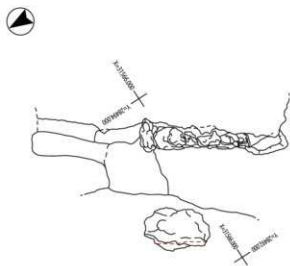


墓口(闭塞石)立面图

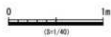
0 50cm
1:100



墓口立面图

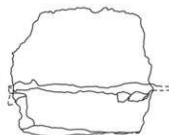


墓口平面图



El.=85.000m

El.=84.000m

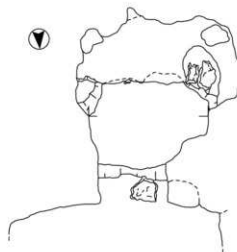
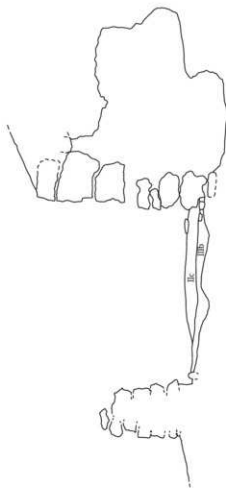


墓室見通し横断面図

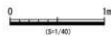
El.=86.000m

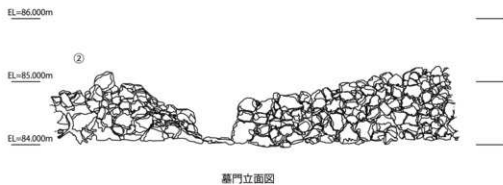
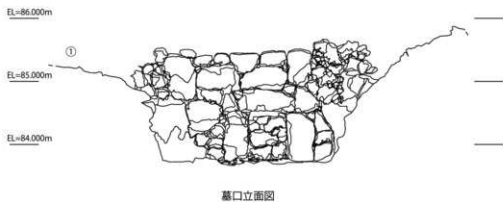
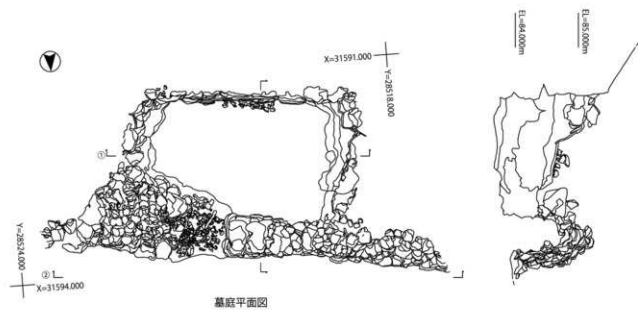
El.=85.000m

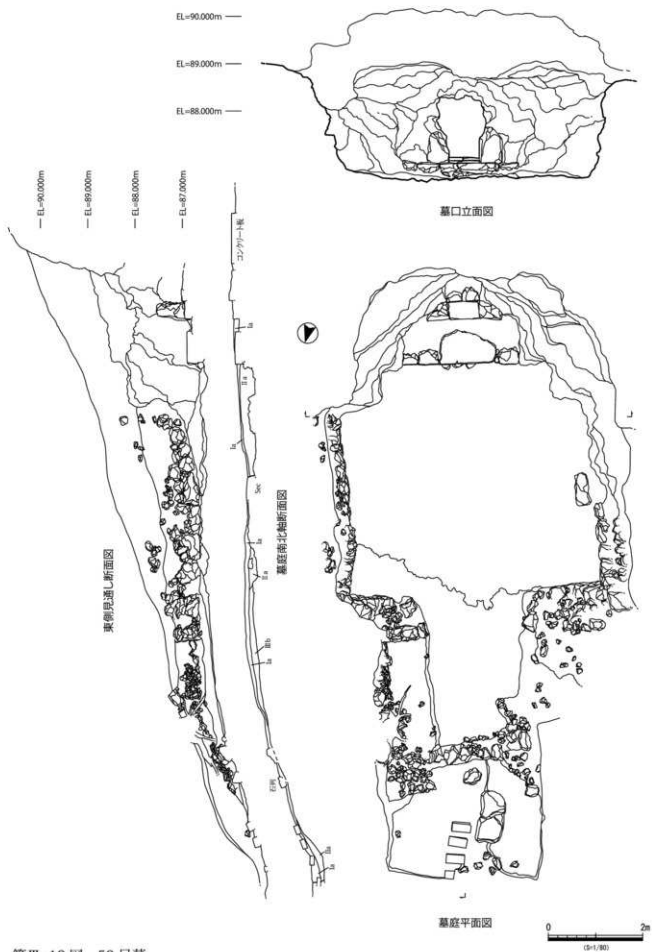
El.=84.000m



墓室平面図







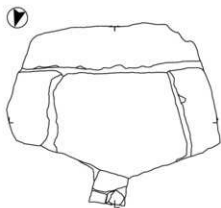
第Ⅲ-10図 50号墓



墓室見通し横断面図



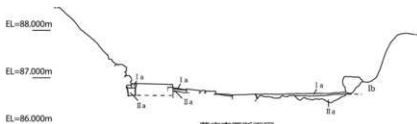
墓室東側見通し断面図



墓室平面図



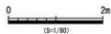
墓室西側見通し断面図



墓庭東西断面図



墓見通し断面図



EL=91.000m

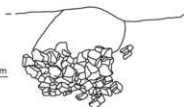


EL=90.000m

EL=89.000m

墓室見通し横断面

EL=91.000m



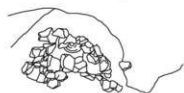
EL=90.000m

EL=89.000m

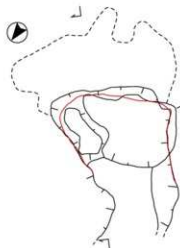
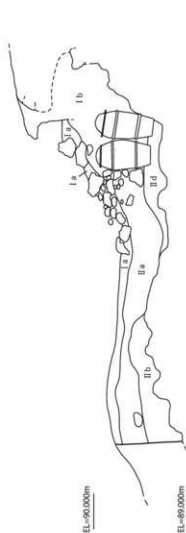
墓口立面図



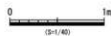
墓平面配置図



墓口平面図



墓室平面図





1号墓半截岩盤検出状況（南東から）



2号墓墓庭半截検出状況（北から）



3～6号墓墓庭2層検出状況（北東から）



8～11号墓墓庭2層検出状況（北西から）



12号墓墓口石積み検出状況（西から）



13号墓墓口石積み検出状況（北から）



14.15号墓墓庭岩盤検出（南から）



16号墓半截東壁（北西から）

図版Ⅲ - 1 検出状況1



17.18号墓転石除去前（北から）



20号墓墓口石積み検出状況（西から）



22号墓墓口石積み検出状況（北から）



23.24.70号墓墓底2層検出状況（北西から）



25号墓袖石積み検出状況内側（東から）



26号墓墓口検出状況（北から）



27号墓墓口検出状況（北から）



28号墓墓口検出状況（西から）



32号墓墓口石積み検出状況（北から）



34号墓墓口検出状況（北から）



38～40号墓墓底2層検出状況（南から）



52号墓墓口検出状況（北から）



63号墓墓口石積み検出状況（北から）



64号墓墓口石積み検出状況（北から）



69号墓墓口石積み検出状況（西から）



74号墓墓口検出状況（西から）



2号墓室内遺物出土状況（東から）



8号墓室内遺物出土状況（北から）



12号墓室内遺物出土状況



13号墓西側墓室内遺物出土状況（北から）



20号墓室内遺物出土状況（西から）



27号墓室内遺物出土状況（北から）



28号墓室内遺物出土状況（西から）



30号墓室内遺物出土状況（北西から）



31号墓墓室内足指骨・足指骨出土状況



31号墓墓室内遺物出土状況（ジューファー）



32号墓墓底遺物出土状況



32号墓墓室内遺物出土状況（北から）



34号墓墓室内遺物出土状況（北から）



38～40号墓墓底（南東側）遺物出土状況（北から）



43号墓墓室内遺物出土状況（北から）



47.48号墓墓底遺物出土状況



49号墓墓室内遺物出土状況（北から）



31号墓墓室内遺物出土状況（ゾーフアー）53号墓墓室内遺物出土状況（北西から）



63号墓墓室内遺物出土状況（北から）



64号墓墓室内遺物出土状況（北から）



66号墓墓室内遺物出土状況（北から）



38～40号墓墓室（南東側）遺物出土状況（北から）67号墓墓室内遺物出土状況（北から）



69号墓墓室内遺物出土状況（西から）



74号墓墓室内遺物出土状況（西から）



3～6号墓完掘状況（北東から）



13号墓西側完掘状況（北から）



20号墓完掘状況（西から）



22号墓完掘状況②



27号墓完掘状況（北から）



28号墓完掘状況（西から）



30号墓完掘状況（北西から）



32号墓完掘状況（北から）



34.353.69号墓完堀状況（北西から）



36.37.65号墓完堀状況（北西から）



35号墓完堀状況（北から）



38～40号墓完堀状況（北から）



43号墓完堀状況（北から）



46～49号墓完堀状況（北西から）



50号墓墓室内完堀状況（南から）



52号墓墓室内完堀状況（北から）



53号墓完掘状況（北から）



63号墓墓室内完掘状況（北から）



64号墓完掘状況（北から）



68号墓完掘状況（北東から）



69号墓完掘状況（西から）



71号墓完掘状況（北から）



72号墓完掘状況（東から）



73.74号墓完掘状況（西から）

3. 遺物

今回の調査で得られた遺物は総計で1,950点余である。出土遺物の数量と内訳は、第Ⅲ-2-1表～3-5表のとおりである。出土した遺物は厨子（蔵骨器）を中心とする沖縄産陶器、近世及び近現代の陶磁器、簪、銭貨、キセル、指輪等の金属製品などである。

i) 厨子（蔵骨器）

確認された厨子を種類ごとに見ると、マンガン掛け焼き締め厨子が最も多く、厨子全体の半数近く占めており、次いでボージャー厨子がマンガン掛け焼き締め厨子の1/3程度の数量で確認されている。前者は全体的に出土するが、後者のボージャー厨子は丘陵の上段及び中段で多く認められ、下段は比較的少ない。また、他の型式については、丘陵中段などで出土する「サンゴ石製石」厨子（5基）、荒焼御殿型厨子が（2基）、上焼コバルト掛け厨子（3基余）などが出土している。

転用品では、主に沖縄産陶器の壺類、宮古式土器、中国産褐釉陶器などが出土している。また火葬用と思われる沖縄産施釉陶器等が出土していて、戦後も墓が使用されていたことが窺える。

ii) その他の遺物

厨子以外の遺物で確認された資料は、陶磁器類、金属製品などであり、それぞれの種別を細かく見ると次のとおりである。

陶磁器類は、沖縄産無釉陶器（壺、甕等）が最も多く、次いで沖縄産施釉陶器（碗、瓶等）、本土産などの磁器（杯類、皿等）と続く。さらに今回の調査では、宮古式土器や中国産褐釉陶器なども丘陵中段部で確認されたことが注目される。

金属製品では、鉄製品（釘、針類等）や青銅製品（簪、銭貨等）等が確認されている。特に針と思われる資料は5～10本が束となって検出されているが、布目を伴う点で注目される。また、簪、銭貨、キセル等は古墓に伴う遺物としてよく知られているが、比較的新しい時期の青銅製と思われる指輪も確認された。

第Ⅲ - 2-1表 厨子観察表1

単位: cm

遺物№	分類	器種	上部器 高さ 下部器	所見(器形・成型方法)	文様・絵書	出土地
第Ⅲ 10 園・ 園版 Ⅲ	1	マンガン掛 底付	蓋 11.7 17.7 33.5	つまみ: 宝珠型(有孔) つまみ台は2段 孔は等間隔で一列穿つ。つまみに7個、つまみに 10個、底部に31個、底下に10個 成型: 外面ロクロナゲ 内面ロクロナゲ、上部ナゲ仕上げ	文様: つまみに丸線3本、 獅子頭型5個配置 絵書: なし 絵葉: 外面全面にマンガン軸	67号墓 墓室内
		身	32.2 66.7 24.6	扉門: 位置型 窓: 3個方形 底部孔: 4個円形、側面に16個円形 成型: 外面ロクロナゲ、胴下部ケズリ 内面ロクロナゲ、底部ナゲ仕上げ	文様: 扉部に龍歯状の連弁文、 窓に獅子頭4個配置 胴部に貼付蓮華文、裏面に縁取りの連弁文 下部に草文、草文文53 横帯: 口縁部2段、胴部1、扉部凸1 扉門上凸1(帯中凹1) 扉門下凸3、凸3(いづれも斜め組み入り) 絵葉: 外面全面にマンガン軸	
第Ⅲ 11 園・ 園版 Ⅲ	2	ボージェャー	蓋 7.0 9.9 30.5	成型: 外面ロクロナゲ(左方向) 上部ケズリ仕上げ	文様: なし 絵書: なし	74号墓 墓室内
		身	28.6 23.0 20.8	扉門: 半筒型 窓: 3個方形 底部孔: 石灰付着のため観察不可 成型: 外面ロクロナゲ、胴下部ケズリ 内面ロクロナゲ、底部ナゲ仕上げ	横帯: 扉部凹3、扉門上凹1、扉門下凹1	
第Ⅲ 11 園・ 園版 Ⅲ	3	マンガン掛	蓋 13.8 17.4 31.2	つまみ: 宝珠型 つまみ台は2段 成型: 外面ロクロナゲ(左方向) 上部と下部ケズリ仕上げ 内面ロクロナゲ、上部ナゲ仕上げ	文様: つまみに丸線2本 絵書: なし 絵葉: 外面全面にマンガン軸	15号墓 墓室内
		身	29.8 56.1 22.1	扉門: 瓦屋型 窓: 方1丸2 底部孔: 5個半月型 成型: 外面ロクロナゲ、胴下部ケズリ 内面ロクロナゲ、底部ナゲ仕上げ	文様: 胴部に蓮華文と法師像貼付 扉門下に草文文2段、凹1 横帯: 口縁部凹2、胴部凸1 扉門上凸1(帯中凹2) 扉門下凸1(帯中凹1)、凹1 絵葉: 外面全面にマンガン軸 窓印: 扉部にあり(別みと墨書)	
第Ⅲ 12 園・ 園版 Ⅲ	4	マンガン掛	蓋 11.9 12.5 28.0	つまみ: 鐘型 つまみ台は1段 成型: 外面ロクロナゲ(左方向)、上部ケズリ 内面ロクロナゲ、上部ナゲ仕上げ	文様: つまみに丸線2本 絵書: あり「□□□□新口築寺之妻□□□□ 墓慶六年辛酉八月十日没書」 絵葉: 外面全面にマンガン軸	34号墓 墓室内
		身	26.5 50.2 20.2	扉門: 唐破風型 窓: 方1丸2 底部孔: 5個半月型 成型: 外面ロクロナゲ、胴下部ケズリ 内面ロクロナゲ、底部ナゲ仕上げ	文様: 胴部に蓮華文貼付 扉門下に草文文2段、凹1 横帯: 口縁部凹2、胴部凸1 扉門上凸1(帯中凹2) 扉門下凸1(帯中凹1) 絵葉: 外面全面にマンガン軸 絵書: あり「墓慶六年辛酉八月没書□□□□ノ 新葬就葬之□□□」	
第Ⅲ 12 園・ 園版 Ⅲ	5	転用	蓋 23.6 46.3 6.5	バナナ焼の壺。丸底で胴部が張る 成型: 外面ナゲ仕上げ 内面: 上部ケズリ、下部ナゲ仕上げ	文様: なし 絵書: なし	70号墓 墓室内 I b層
		身	55.0 42.8 44.6	入母屋造り 孔: 正面方形2個、両側面円形2個、底部円形2個 成型: 外面型押し、内面型押し後、ナゲ仕上げ	文様: 樽中央に龍頭、大樽上部に鱗一對 中央に魚刺で環状文を施す 絵葉: マンガン軸を外面全面に施す	
第Ⅲ 13 園・ 園版 Ⅲ	6	陶製家型	蓋 46.3 43.5 37.5	扉門: 唐破風型 窓: 正面2個方形、裏面1個方形 孔: 底部4個円形、正面2個、両側面2個円形 成型: 外面型押し、内面型押し後、ナゲ	文様: 正面中央に龍頭、四隅に獅子頭、 扉門内に龍一對 扉門左右に獅子、蓮華文貼付、 上部に草文、棒状に型押し文 両側面に蓮華文 全面に型押し平円を不規則に型押し、 鱗を表現する 絵葉: 内外面にマンガン軸	67号墓 墓室内
		身	30.5 18.5 50.2	入母屋造り 正面に番木を彫刻 成型: ケズリ出し後に研磨し平出に仕上げる 内面はノミによるケズリ痕が明瞭に残る	彩色: 正面に墨で不明文様を描く 番木、棟上部に朱色 内面に墨と朱色で不明文様	
第Ⅲ 13 園・ 園版 Ⅲ	7	サンゴ石製	蓋 49.0 42.5 53.9	箱型。削り出しによって下部に帯を造る 正面中央に4段階段 成型: ケズリ出し後に研磨し平出に仕上げる 内面はノミによるケズリ痕が明瞭に残る 窓: 正面に2個方形	彩色: 正面上部は朱色で6分割の区画線を描き、 その線の縁を墨で輪引きする。 側面に墨と朱色で草木を描く。 横帯: 正面中央にあり 「晩唐貞享之□□□□□□給四年八月 □□日没書□□」	34号墓 墓室内
		身	12.0 14.0 29.8	つまみ: 鐘型 つまみ台は1段 成型: 外面ロクロナゲ、上部ケズリ 内面ロクロナゲ、上部ナゲ仕上げ	文様: つまみに丸線2本 絵書: あり「墓慶二年己八月□□□□妻」 絵葉: 外面全面にマンガン軸	
第Ⅲ 14 園・ 園版 Ⅲ	8	マンガン掛	蓋 26.8 52.7 21.3	扉門: 瓦屋型 窓: 方1丸4 底部孔: 5個半月型 成型: 外面ロクロナゲ(左方向)、胴下部ケズリ 内面ロクロナゲ、底部ナゲ仕上げ	文様: 胴部に縁取りの蓮華文、 胴部左に貼付の蓮華文 横帯: 口縁部凹2、胴部凸1 扉門上凸1(帯中凹2) 扉門下凸1(帯中凹1) 絵葉: なし	13号墓東 墓室内
		身				

第Ⅲ - 2-2 表 厨子観察表2

単位:cm

遺物№	分類	器種 上部種 器高 下部種	所見(器形・成型方法)	文様・銘書	出土地	
第Ⅲ 14 回 ・ 國 庫 Ⅲ 17	9	マンガン拵	蓋	つまみ:宝珠型(有孔) つまみ台は1段 成型:外面ロクロナダ、上部ケズリ仕上げ 内面ロクロナダ、上部ナデ仕上げ	文様:つまみ台に團輪1本 銘書:なし 釉薬:外面全面にマンガン釉	13号墓 墓室内
			身	扉門:唐破風型 窓:1個方形 底部孔:6個半月型 成型:外面ロクロナダ、扉下部ケズリ 内面ロクロナダ、底部ナデ仕上げ	文様:胴部に蓮華文 扉門下に波状文① 横帯:口縁部②、扉部① 扉門上①(帯中②) 扉門下①(帯中①)、③ 釉薬:外面全面にマンガン釉	
第Ⅲ 15 回 ・ 國 庫 Ⅲ 18	10	マンガン拵	蓋	つまみ:宝珠型 つまみ台は2段 成型:外面ロクロナダ、上部ケズリ 内面ロクロナダ、上部ナデ仕上げ	文様:つまみ台に團輪1本 銘書:あり「大清同治六年巳卯口縁口まつ □□裏口戸」 釉薬:外面全面にマンガン釉	39号墓 墓室内
			身	扉門:アーチ型 窓:3個方形 底部孔:8個円形 成型:外面ロクロナダ(左方内側)、扉下部ケズリ 内面ロクロナダ、底部ナデ仕上げ	文様:扉部に輪彫りで蓮華文、波状文⑤⑥ 胴部蓮華文、波状文⑦⑧、⑨⑩ 横帯:口縁部②、扉部① 扉門上①(帯中②) 扉門下③、④、④④ 釉薬:外面全面にマンガン釉	
第Ⅲ 16 回 ・ 國 庫 Ⅲ 19	11	銅殿型	蓋	40.0 入母屋造り 35.2 孔:両側面円形5個 47.6 成型:外面型押し、内面型押し後ナデ、下部ケズリ	文様:大棟上部に銀一對 獅子頭一對を北面・裏面に貼り付け 銘書:あり「付仰三〇嘉慶〇四年□□□ 光緒二年丙子表背四人墓」 釉薬:模成後、外面全面に輝喰を塗り、さらに墨 で彩色したと思われる。	74号墓 墓室内
			身	扉門:アーチ型+柱ヌキ 窓:正面3個方形(玉下1個 柱ヌキ下2個) 孔:底部9個円形 成型:外面型押し、内面型押し後ナデ、ケズリ モミゴウ入	文様:屋根部正面中央と西端に獅子頭 正面に蓮華文、上部に榜子文 両側面に出現後、蓮華文 釉薬:模成後、外面全面に輝喰を塗り、さらに墨 で彩色したと思われる。	
第Ⅲ 16 回 ・ 國 庫 Ⅲ 19	12	ボージャー	蓋	6.3 つまみ:鐘型 11.5 成型:外面ロクロナダ(左方向)、上部ケズリ 31.0 内面ロクロナダ	文様:なし 銘書:あり「付仰三〇嘉慶〇四年□□□ 光緒二年丙子表背四人墓」	6号墓 墓室内
			身	扉門:平舟型 窓:1個方形 底部孔:5個円形 成型:外面ロクロナダ(左方向)、扉下部ケズリ 内面ロクロナダ、底部ナデ仕上げ	横帯:扉部③、扉門上①、扉門下①	
第Ⅲ 16 回 ・ 國 庫 Ⅲ 19	13	小型 マンガン拵	蓋	つまみ:扁平に近い鐘型(有孔) つまみ台は1段 成型:外面ロクロナダ、上部ケズリ仕上げ 内面ロクロナダ、上部ナデ仕上げ	文様:なし 銘書:なし 釉薬:外面全面にマンガン釉	67号墓 墓室内
			身	扉門:唐破風型(輪彫り) 窓:3個円形 底部孔:11個方形 成型:外面ロクロナダ、扉下部ケズリ 内面ロクロナダ、底部ナデ仕上げ 網3個貼り付け	文様:扉部に蓮華文、波状文②② 胴部葉文、波状文②② 横帯:口縁部② 扉門上④ 扉門下④、③ 釉薬:外面全面にマンガン釉	
第Ⅲ 16 回 ・ 國 庫 Ⅲ 19	14	マンガン拵	蓋	13.5 つまみ:宝珠型 16.5 つまみ台は2段 28.8 成型:外面ロクロナダ、上部ケズリ仕上げ 内面ロクロナダ、上部ナデ仕上げ	文様:つまみ台に團輪2本、1本 銘書:あり「付仰嘉慶式拾四年□□ 女」 釉薬:外面全面にマンガン釉	9号墓 墓室内
			身	扉門:瓦屋型 窓:3個方形 底部孔:6個半月型(貫通無い) 成型:外面ロクロナダ、扉下部ケズリ 内面ロクロナダ、底部ナデ仕上げ	文様:胴部に蓮華文、扉部に華文 横帯:口縁部②、扉部① 扉門上①(帯中②) 扉門下①(帯中①) 釉薬:外面全面にマンガン釉	

第Ⅲ-3-1 その他の遺物観察表 1

図版番号	種別	器種	部位	観察事項	出土地	
図版Ⅲ・17	1	磁器	壺	口～底	底部から「S」字状に立ち上がり、長頸から口縁部がラッパ状に開く資料。畳付際が面取りされる底部は高台状を呈すが外側に開く。畳付及びその周縁のみ露胎する。外面には呉須で唐草文?及び吉祥文などが描かれ、外底面には「武」「口製」の文字が呉須で書かれる。口径約20.0cm、底径約13.0cm。本土産染付の転用品。	70号墓 庭Ⅰa層
	2	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	腰部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は直口を呈す。胴部は楕円状の面取りが施される。白化粧後に透明釉を施すが、内底面は蛇の目釉刺しがなされる。畳付にはアルミナが付着する。内底面に溶着の痕跡が見られる。器高約4.5cm、底径約4.0cm。	29-30号墓 庭Ⅰa層
	3	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	胴下部からやや丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部はほぼ直口を呈する。白化粧後に透明釉を施すが、内底面は蛇の目釉刺しがなされる。畳付にはアルミナが付着する。外器面に溶着の痕跡が見られる。口径約8.0cm、器高約4.2cm、底径約3.8cm。	52号墓 庭Ⅱa層
	4	磁器	小碗	口～底	腰部から直線的に立ち上がる資料で、直口の口縁を有し、全面を施釉する。高台、畳付、一部の外底面には溶着を防ぐ砂が付着する。口径約3.6cm、器高約1.9cm、底径約1.9cm。	32号墓 庭Ⅱa層
	5	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	胴下部からやや丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部は微弱に外反する。白化粧後に透明釉を施すが、内底面は蛇の目釉刺しがなされる。外器面には線影りの二条丸文が3か所に施文され、緑釉で彩られる。畳付には焼成後の摩耗が見られるものの、アルミナも一部に残る。破損後に被熱を受ける。口径約13.2cm、器高約6.3cm、底径約6.2cm。	29-30号墓 庭Ⅰa層
	6	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	胴下部からやや丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部は外反する。白化粧後に透明釉を施すが、内底面は蛇の目釉刺しがなされる。外器面には褐釉で描かれた丸文を呉須の点文が複数で囲うように配される。内器面の一部にも呉須が付着する。畳付にはアルミナが付着する。口径約14.2cm、器高約6.5cm、底径約6.4cm。	53号墓 庭Ⅰa層
図版Ⅲ・18	7	沖縄産 施釉陶器	水注	口～底	酒器。胴下部が「く」の字状に屈曲し、胴上部部に漏斗状の口縁、肩部には注口を有する。高台の内側は、斜めに面取りがなされる。全体の白化粧後に胴上部に線影りやスタンプ文及び呉須、褐釉、緑釉などを用いた施文をし、透明釉を施す。施釉後は高台内の面取り部の釉を掻き取ったことで、面取り部は露胎するものの、一部に白化粧の白土が残る。施釉前に腰部が一部欠けていたことが窺える。口径約5.2cm、器高約10.1cm、底径約7.8cm。	66号墓 室内Ⅰb層
	8	沖縄産 施釉陶器	瓶	口～底	いわゆる対瓶。比較的低い脚台から外側に広がるように立ち上がり、長頸を有する外反口縁の資料。肩部には二重の圏線や笹の葉状の文様を3か所に施し、胴下部には従位沈線の上下に二条の圏線が閉鎖する。口縁内や外器面全体に船輪及び透明釉を施したのち、脚台側面から内側にかけて釉刺ぎをし、アルミナを塗布する。口径約3.4cm、器高約14.8cm、底径約6.8cm。	31号墓室 床直
	9	沖縄産 施釉陶器	瓶	口～底	底部から頸部に向かって窄まりながら立ち上がる資料で、長頸かつ外反を呈する。外底面は削り出して窪ませる。口縁内や外器面に褐釉のみを施すが、胴下部や外底面はほぼ露胎する。本資料はよく焼き締められている。口径約2.6cm、器高約13.5cm、底径約6.2cm。	25号墓庭 周辺Ⅰa層
	10	沖縄産 施釉陶器	瓶	口～底	いわゆる瓶子。比較的高めの脚台や丸みを帯びる腰部を有する長頸の資料で、口縁部はラッパ状に開く。外器面は白化粧後に頸部、胴部、脚台に褐色や水色の染料で複数の圏線を施文する。脚台の内面は白化粧を施さず、褐釉と透明釉を施釉する。畳付にはアルミナが塗布される。口径約5.8cm、器高約20.6cm、底径約8.6cm。	32号墓 庭Ⅰa層

第Ⅲ-3-2 その他の遺物観察表2

図版番号	種別	器種	部位	観察事項	出土地
図版Ⅲ 17	沖縄産 施軸陶器	瓶	口～底	いわゆる対瓶。底部から外側に微弱に広がるように立ち上がり、肩部で丸みを帯びながら頸部に向かって窄まる長頸を有する資料。外底面は削り出しにより窪む。頸部下及び肩部に二条の圓線を施し、各二条の圓線下方に飛びがんなによる施文をする。口縁部から肩部下まで白化粧をし、頸部までを緑釉で施軸する。胴下部は褐釉を施す。その後全体的に透明釉を掛ける。壺付は軸を掻き取り、アルミナを塗布する。口径約2.0cm、器高約16.0cm、底径約6.2cm。	27～74号墓 底1a層
	沖縄産 施軸陶器	瓶	口～底	いわゆる対瓶。高台から丸みを帯びるように立ち上がり、頸部下で窄まる長頸の資料で、口縁部がラッパ状に広がる。壺付部は浴着のためか欠損する。口縁内部から高台外側まで白化粧をした後、口縁内外に緑釉や青味のある釉を掛け流し、胴部には4か所に葉状の文様が緑釉などで施される。掛け流し部分、葉状の施文部、外底面の一部には透明釉が施されるが、白化粧部分には透明釉は施されない。口径約5.0cm、器高約14.5cm。	74号墓 底1a層
	沖縄産 施軸陶器	瓶	口～底	いわゆる渡名喜瓶の範疇。高台から腰部にかけて丸みを帯びながら立ち上がり、窄まった腰部から「く」の字状に屈曲する肩部まで直線的に立ち上がる。肩部からさらに窄まり頸部及び外反口縁を形成する。肩部下及び腰部にそれぞれ二条の圓線を施す。口縁内部から肩部下に白色系の釉を施し、その下に褐色の釉を高台付近まで掛ける。壺付及び外底面は施釉されない。高台の一部が欠けた後の摩耗が見られる。口径約3.2cm、器高約14.7cm、底径約5.4cm。	46～49号墓 底1a層
	沖縄産 無軸陶器	瓶	口～底	ベタ底の体部から丸みを帯びながら立ち上がり、最も窄まる頸部からラッパ状に広がる口縁部にかけてさらに立ち上がる資料で、比較的短い頸部を有する。頸部下に一条の圓線を施す。胴下部はヘラ削りを施すが、胴上部はナデ調整が認められる。本資料はよく焼き締められている。口径約4.4cm、器高約12.6cm、底径約5.6cm。	66号墓 室内1b層
図版Ⅲ 19	沖縄産 施軸陶器	壺	口～胴	外側に開くような口縁部から直線的に立ち上がる頸部を有す。肩部は弧を描くようになだらかに胴部にいたる。肩部には4か所に耳を添付し、1か所の耳下方に黒印と思われる円を文様で描く。肩部には圓線が1～2条廻る。口径約18.0cm。転用厨子か？	70号墓 室内1b層
	沖縄産 施軸陶器	壺	口～底	全体的に球状を呈する胴部に短い頸部及び玉縁状の肥厚口縁を有す焼締壺。胴部を打ち欠いて厨子の代用に用いたものと思われる。口径約12.0cm、底径約16.0cm。転用厨子。	53号墓 室内1b層
	沖縄産 無軸陶器	壺	胴部	撫で肩を有する頸部。肩部には逆「ハ」の字状を呈する突起を添付する。頸部下方及び突起部に二条の圓線が円繞する。内外面ともにナデ調整がなされる。転用厨子か？	34号墓 室内一括
	褐釉陶器	壺	口～胴	方形状の口縁部から胴部にかけてやや広がるような頸部を有し、肩部は大きく張る。肩部には目痕を除去した際に褐釉も剥がれた状況及び叩き痕が見受けられる。口径約14.0cm。転用厨子。	34号墓 室内一括
	褐釉陶器	壺	胴～底	やや上げ底状を呈する資料で、器面は外側に開くように立ち上がる。胴下部には轆轤痕が顕著に残る。外底面及び内底面周辺は露出する。底径約15.0cm。転用厨子。	34号墓 室内一括
図版Ⅲ 20	褐釉陶器	壺	口～胴	方形状の口縁部から胴部にかけてやや広がるような頸部を有し、肩部は丸みを帯びるように張り、胴下部が窄まる資料。肩部には目痕及び叩き痕が見受けられる。口径約14.0cm。転用厨子。	25号墓 底周1a層
	土器	壺	口～胴	宮古式土器。やや舌状を呈する口縁部から撫で肩気味に胴部にいたる資料。外面は基本的に研ぎがなされる。内面はナデ調整がなされるが、アバタ状の器面も顕著に残る。胎土に白色粒や黒色粒の混入物が含まれる。口径約26.0cm。23と同一個体か。	34号墓 室内一括

第Ⅲ-3-3 その他の遺物観察表3

図版番号	種別	器種	部位	観察事項	出土地
22	土器	不明	底部	平底の底部から逆「ハ」の字状に立ち上る資料。器面はナデ調整がなされる。胎土には白色、赤色、黒色の粒子が含まれる。	38～40号墓 庭Ⅱa層 47・48号墓 室内Ⅰa層
23	土器	不明	胴～底	宮古式土器。平底の底部から外側に開くように立ち上る資料。外面は研ぎがなされるが、底部際はナデ調整となる。内面はナデ調整がなされるが、アバタ状の器面も顕著に残る。胎土に白色、赤色、黒色の粒子が混入する。底径約18.0cm。21と同一個体か。	34号墓 室内一括
24	アカムヌー	蓋	つまみ 下端部	高台状のつまみ部から下端部に向かって「ハ」の字状に開く。つまみ部は削り出しにより作られる。上部は内外面ともにナデ調整がなされ、端部はヘラ削り等の痕跡が見られる。胎土には赤色及び黒色粒子が含まれる。上部径約5.4cm、器高約3.4cm、下部径約11.0cm。	73～74号墓 庭Ⅱa層 27号墓 溝Ⅰa層
25	金属製品	キセル	吸口	型押し(?)により作られた資料。羅字接続部から吸口部にかけて窄まる。羅字接続部に羅字が残る。吸口外径約0.4cm、内径約0.3cm、小口外径約0.85cm、内径約0.75cm、長さ約5.45cm。	13号墓 庭Ⅰa層
26	無軸陶製	キセル	雁首	細かく面取りをし、丸みを帯びる資料。羅字接続部は火皿側に比して径が大きくなる。火皿内底面は雑な仕上がりの。火皿外径約1.6cm、内径約1.0cm、小口外径約1.3cm、内径約0.9cm、長さ約3.4cm。	13号墓 西側墓室 Ⅰb層
27	施軸陶製	キセル	雁首	全体的に丸みを帯びる資料。羅字側と火皿の接続部で窄まるが、羅字接続部は径が大きい。羅字接続部以外は縁軸が施され、その施軸範囲は火皿内のほぼ全面にまで及ぶが、外面の軸は大半が剥がれる。火皿外径約1.4cm、内径約1.1cm、小口外径約1.45cm、内径約0.9cm、長さ約2.4cm。	13号墓東 室内Ⅰb層
28	瓦質製品	キセル	雁首	羅字側は7面に面取りがされ、火皿は8面に面取りがされる。外面の稜線は明瞭。胎土に白色粒子が見られる。火皿外径約1.9cm、内径約1.4cm、小口外径約1.45cm、内径約0.9cm、長さ約4.1cm。	23・24・ 70号墓 庭Ⅱa層
29	青銅製品	キセル	雁首	羅字接続部に羅字が残る資料。火皿の口縁部がやや歪む。火皿内に付着物が目立つ。火皿外径約1.25cm、内径約1.1cm、小口外径約1.1cm、内径約0.9cm、長さ約3.8cm。	46号墓 庭Ⅱa層
30	瓦質製品	キセル	雁首	細かく面取りをし、丸みを帯びる資料。羅字接続部は火皿側に比して径が大きくなる。火皿外径約1.55cm、内径約1.0cm、小口外径約1.4cm、内径約0.85cm、長さ約3.2cm。	25号墓 庭Ⅰa層
31	青銅製品	簪	カブ ? 竿	副簪で耳掻き状を呈する。カブ以下は全体的に扁平。首の稜は不明瞭。首と竿の境となるムディは微弱な段を設ける。竿の先端付近はやや径が大きくなる。長さ約8.45cm、重量約3.05g。	31号墓 庭Ⅱa層
32	青銅製品	簪	カブ ? 竿	形状は女性用の本簪(ジーフアー)で匙状となるが、小型のため未成年の男女兼用品の可能性も考えられる。首から竿にみられる稜線が明瞭。長さ約6.6cm、重量約1.45g。	40～42号 墓庭
33	青銅製品	簪	カブ ? 竿	男性用の本簪(髮差)。花部は本体から剥離する。花弁は6枚で丸みを帯びる。首の断面は不明瞭ではあるが六角形を呈す。ムディも磨滅のため螺旋状のねじりが確認できない。竿は断面四角形を呈し、先端部に向けて径が大きくなる。長さ約8.1cm、重量約11.6g。	30号墓 室内Ⅰb層
34	青銅製品	簪	カブ ? 竿	男性用の本簪(髮差)。花部は本体から剥離する。花弁は6枚で三角形形状を呈す。首の断面は六角形を呈す。ムディは付着物があるため螺旋状のねじりは確認できない。竿は断面四角形を呈し、先端部に向けて径が大きくなる。長さ約11.25cm、重量約17.15g。	63号墓室 厨子443内
35	鉄製品	針?	—	少なくとも6本が錆により付着する。錆に布目が見られることから袋状の入れ物に入っていたことが推測される。最大長約3.45cm、重量約1.05g。	67号墓室 床直

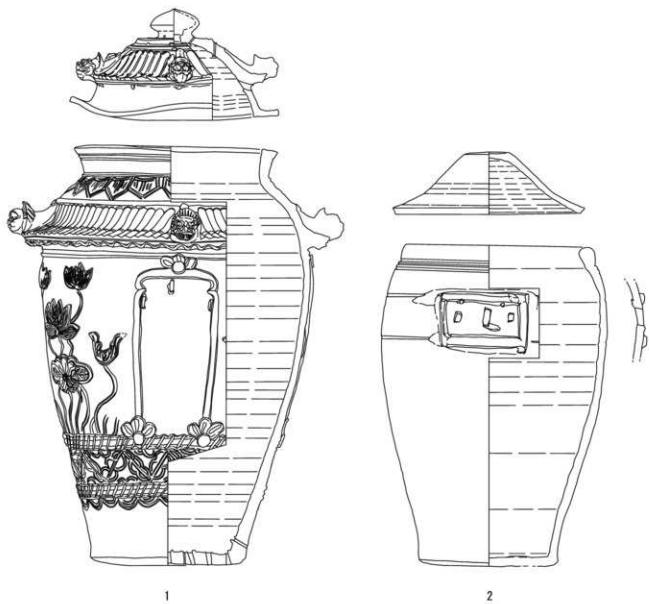
第三 - 3-4 表 その他の遺物観察表 4

図版番号	種別	器種	部位	観察事項	出土地	
図版Ⅲ・20	36	鉄製品	針?	—	少なくとも7本が錆により付着する。布目状を有する付着物があることから袋状の入れ物に入っていたことが推測される。最大長約5.4cm、重量約2.3g。	38号墓室 厨子470内
	37	青銅製品	指輪	—	型押し(?)により作られた資料で、外面に二条の圏線が見られる。内径約1.8cm、幅約0.4cm、重量約2.1g。	43号墓 厨子487内
	38	青銅製品	指輪	—	型押し(?)により作られた資料。内径約1.8cm、幅約0.45cm、重量約1.65g。	43号墓 厨子487内

第三 - 3-5 表 その他の遺物観察表 (銭貨)

単位:cm/g

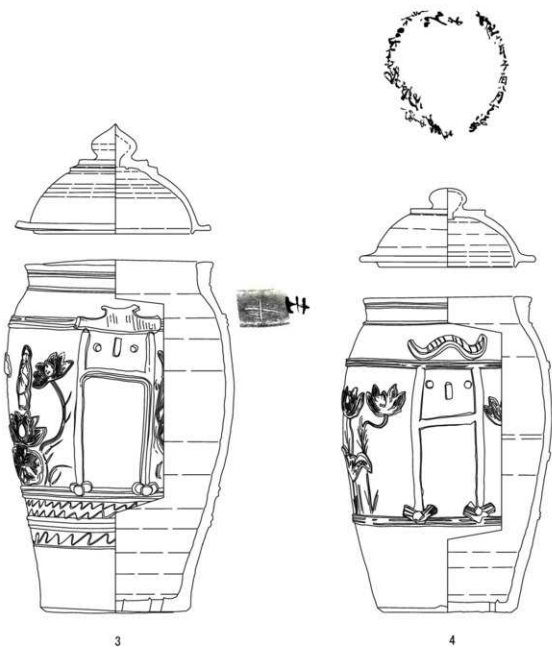
図版番号	遺物番号	出土地点	銭種	外径	内径	孔径	銭厚	重量	備考
第三・20図・図版Ⅲ・21	1	10・11号 庭 表探	寛永通寶(古)	2.37	1.96	0.58	0.1	3.22	孔郭にヘリが残る。
	2	39号 庭Ⅱ a層	一銭	2.3	2.02	-	0.11	3.62	大正十年。
	3	38・40号 庭 I a層	寛永通寶(新)	2.25	1.71	0.62	0.1	2.49	背文 元。
	4	48・49号 庭 II a層	寛永通寶(新)	2.4	1.9	0.62	0.1	2.76	マ通。
	5	49号 庭 II a層	寛永通寶(新)	2.2	1.72	0.63	0.1	2.08	背文 足。
	6	38号 庭 II a層	寛永通寶(新)	2.34	1.92	0.67	0.09	2.45	dot9
	7	45・46号 庭 II a層	寛永通寶(新)	2.17	1.74	0.66	0.11	2.1	
	8	11号 庭 II a層	寛永通寶(文銭)	2.5	2.03	0.62	0.1	3.84	背文 文。Dot21
	9	11号 庭 II a層	寛永通寶(新)	2.29	1.96	0.75	0.08	2.64	背文 小。Dot23
	10	25号 室外 表探	寛永通寶(文銭)	2.48	2.05	0.66	0.1	2.66	背文 文。
	11	29号 庭 I a層	寛永通寶(新)	2.4	1.89	0.67	0.1	2.33	孔郭わずかに欠損。マ通。
第三・21図・図版Ⅲ・22	12	50号 庭 I b層	永樂通寶	2.48	2.08	0.6	0.12	3.54	初鑄年明、1408年。寶の珠が竹になる。
	13	50号 庭 I 層	銭種不明(鉄銭)	2.41		0.6	0.19	5.67	2枚付着。一方は永の字が確認できる。
			銭種不明(鉄銭)	2.06		0.63	0.17		
	14	36号 庭 I a層	一銭	1.6	1.43	-	0.14	0.66	昭和十六年。アルミ。
	15	66号 室内 I b層	寛永通寶(新)	2.43	1.98	0.64	0.12	2.95	背文 佐。
	16	50号 庭 II a層直上	寛永通寶(新)	2.16	1.71	0.68	0.09	2.17	dot50
	17	31号 室内床直	寛永通寶(新)	2.33	1.82	0.6	0.12	2.71	布・木片付着。Dot47
	18	43号 室内 I b層	寛永通寶(新)	2.34	1.73	0.53	0.13	3.12	
	19	43号 室内 I b層	寛永通寶(新)	2.3	1.7	0.52	0.12	3.1	背文 元。
	20	50号 室内 表探	寛永通寶(新)	2.3	1.86	0.64	0.07	2.37	背文 元
	21	14・15号 庭 I a層	寛永通寶(新)	2.55	2.07	0.59	0.1	3.74	やや変形する。
22	74号 室内 厨子472内	銭種不明	2.32	1.88	0.63	0.1	1.86		
23	25号 庭周辺 I a層	寛永通寶(古)	2.43	1.97	0.56	0.13	3.26	孔郭にヘリが残る。	
24	31号 室内床直	銭種不明	2.3	1.92	0.6	0.1	2.55	布付着。Dot43	
25	31号 室内床直	銭種不明	2.36	1.82	0.67	0.08	2.35	木片付着。□元通寶か□通元寶。Dot41	
26	24号 室内 II a層	輪銭	1.88	-	0.89	0.08	0.73	郭穴は方形形状。	
27	28号 庭 II a層	端平通寶(当三銭)	3.5	3.1	0.84	0.22	12.18	初鑄年南宋、1234年。周縁部がわずかに欠損。Dot49	
28	23・24・70号 庭 II a層	輪銭	1.23	-	0.76	0.05	0.18	破損。郭穴は方形形状。	



第Ⅲ-13图 厨子(咸骨器) 1



图版Ⅲ-10 厨子（藏骨器）1



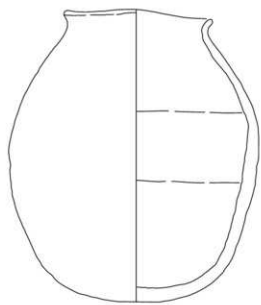
永慶二年
 形彩傳記
 新橋
 八月
 八日
 八日
 八日

0 10cm
 (3-1/4)

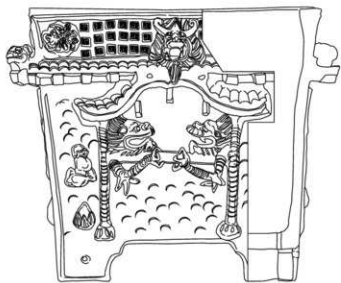
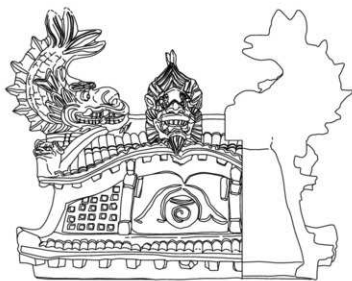
第Ⅲ-14 厨子（蔵骨器）2



图版Ⅲ-11 厨子（藏骨器）2



5



6



第Ⅲ-15 冢 厨子（藏骨器） 3

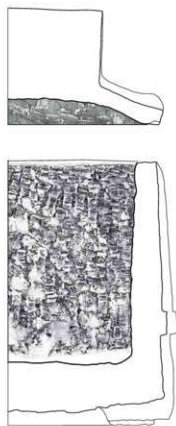
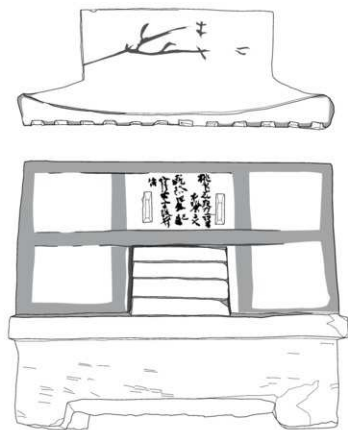


5



6

圖版Ⅲ-12 厨子（藏骨器）3



7

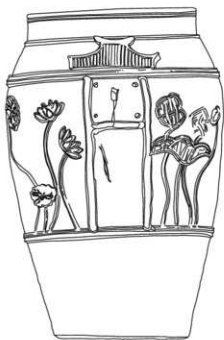
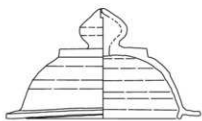
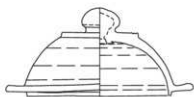
0 10cm
G-1/4

第Ⅲ-16图 厨子(藏骨器) 4

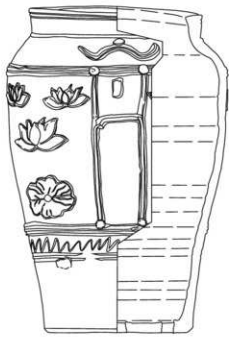


图版Ⅲ-13 厨子（藏骨器）4

七
 五
 二
 八
 介
 之
 六



8



9

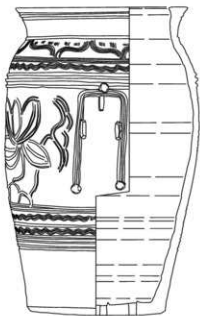


第Ⅲ-17图 厨子(藏骨器) 5

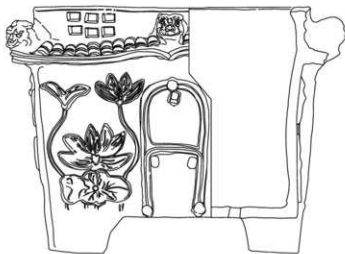
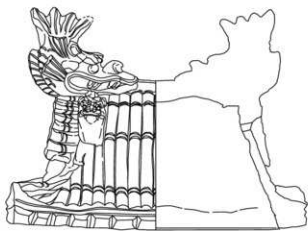


图版Ⅲ-14 厨子（藏骨器）5

大正十四年
己卯年
子月
廿五日
吉野
斎



10



11



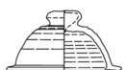
第III-18 厨子（蔵骨器）6



10

11

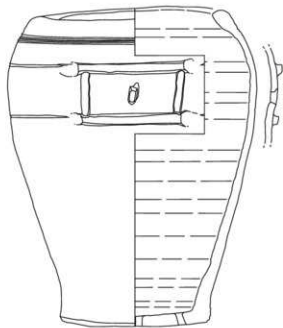
图版Ⅲ-15 厨子（藏骨器）6



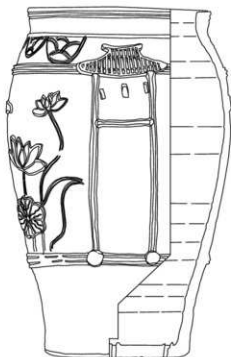
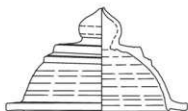
13

此器一類
 其形如
 豆而大
 其口如
 盆而廣
 其底如
 盤而平
 其蓋如
 斗而圓
 其飾如
 雲而卷
 其色如
 土而紅
 其質如
 石而堅
 其用如
 器而廣
 其名如
 豆而大

此器一類
 其形如
 豆而大
 其口如
 盆而廣
 其底如
 盤而平
 其蓋如
 斗而圓
 其飾如
 雲而卷
 其色如
 土而紅
 其質如
 石而堅
 其用如
 器而廣
 其名如
 豆而大



12



14



第III-19图 厨子(藏骨器) 7



图版Ⅲ-16 厨子（藏骨器）7



图版Ⅲ-17 陶磁器 1



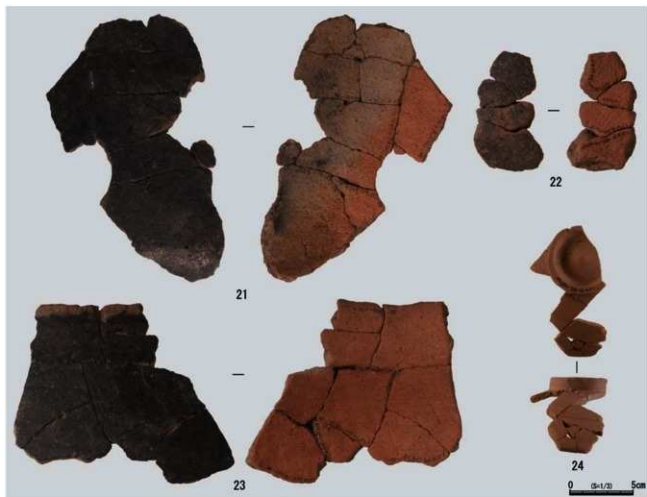
图版Ⅲ-18 陶磁器 2

0 1/2 5cm

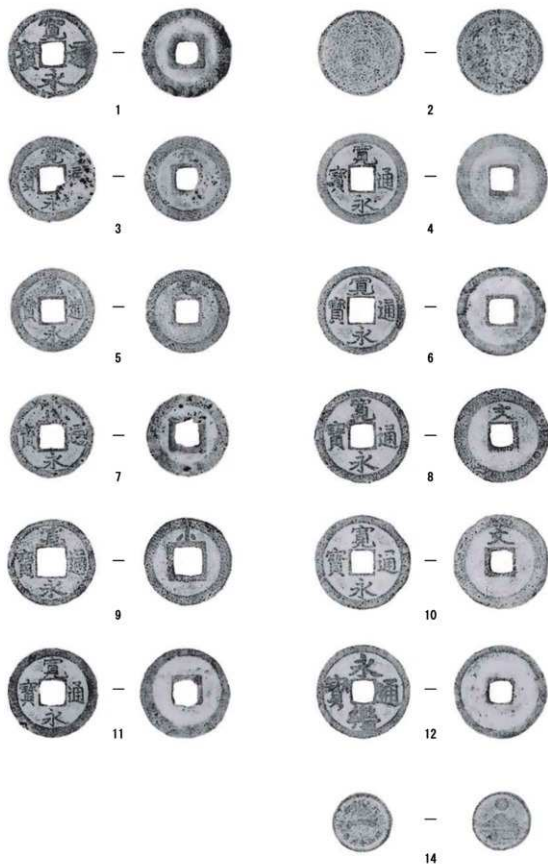


图版Ⅲ-19 陶磁器 3

0 5-1/2 10cm

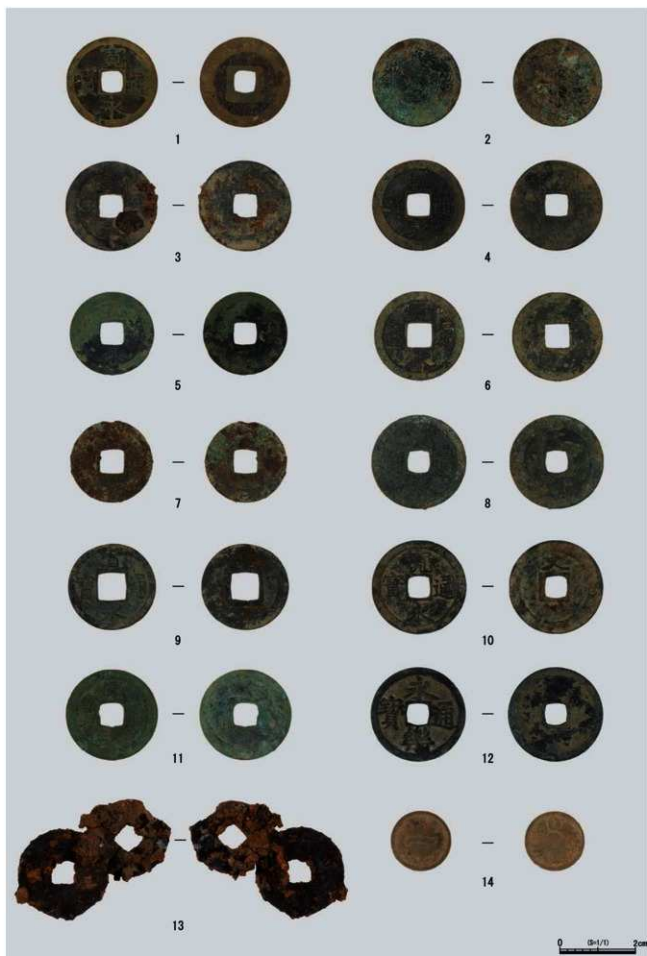


図版Ⅲ-20 上：土器 下：煙管・簪・金属製品



※13の拓本なし

0 0-1/1 2cm



図版Ⅲ-21 銭貨1



15



16



17



18



19



20



21



22



23



27



※24. 25. 26. 28 の拓本なし





圖版Ⅲ-22 錢貨2

4. 被葬者

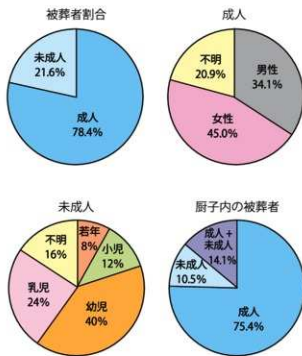
今回の調査において確認された被葬者（人骨）について本節で概要を報告する。調査の対象となった古墳56基のうち、厨子内への安置なども含めて人骨が検出された古墳は38基であった。人骨の状態は小片状や粉状のものが含まれており、形態的な情報が得られにくいものもあったため、主に被葬者の構成に注目しつつ人骨の確認を行った。各古墳の被葬者数は第Ⅲ-5-1表に示す。

人骨は38基の古墳から少なくとも116体分が確認された。その多くは墓室内に安置されていた厨子から検出されており、厨子内から87体分（75.0%）、厨子以外からは29体分（25.0%）の人骨が認められた。なお、厨子以外より確認された2体分については、31号及び67号墓において一次葬の状態であった。人骨の構成は、成人が91体分（78.4%）で、未成年が25体分（21.6%）であった。前者の成人被葬者は男性が31体分（34.1%）、女性が41体分（45.0%）、性別不明が19体分（20.9%）である。後者の未成年被葬者については、若年が2体分（8.0%）、小児が3体分（12.0%）、幼児が10体分（40.0%）、乳児が6体分（24.0%）、不明が4体分（16.0%）となっており、性別はいずれも確認できなかった。

墓室内に最も多く残存していた人骨の数は11人分で66号墓であった。次いで10人分の人骨が確認された古墳は9号及び67号墓の2基となり、以降7人分以下1人分ずつ減じていく。6～3人分の人骨が検出された古墳はそれぞれ2～3基となり、2人分が確認された古墳が6基、1人分の人骨検出が17基余であった。このことから、墓室内において多人数分の人骨が確認された古墳は1～2基程度にとどまることが現れている状況が認められた。

人骨が確認された厨子は57基であった。そのうち、成人のみの人骨が納められていた厨子は43基（75.4%）、未成年のみが納められていた厨子は6基（10.5%）、成人とともに未成年の人骨も確認された厨子は8基（14.1%）であった。

今回の調査をとおして、全体的に未成年の被葬者が成人に比して少ない状況であることが認められた。また、数少ない未成年が親と思われる成人とともに同じ厨子に納められることが必ずしも一般的であったわけではないことも窺えた。未成年の被葬者に対する葬儀的な扱いを近隣地域の状況や民俗学的な視点なども併せて検討を進める必要がある。



第Ⅲ-22図 被葬者各構成割合

第Ⅲ - 6 - 1 表 推定被葬者数 I

墓No.	出土地		成人				未成人				備考	合計		
	検出情報		男性	女性	不明	計	若年	小児	幼児	乳児			不明	計
	男性	女性												
02号墓	厨子墓437					0					1	1	骨片 (乳~幼児)	1
03~07号墓	厨子墓468	1			1						0	0	膝蓋骨1点のみ	1
03号墓	厨子墓306				0			1			1	1	流入土内	1
03号墓	厨子墓388				0			1			1	1		1
08号墓	厨子墓438			1	1						0	0	火葬骨	1
08号墓	厨子墓488	1	1		2			1			1	1	上腕骨右病変あり (男性)	3
09号墓	墓室内流入土394			1	1			1	1		2	2		3
09号墓	墓室内一括	1			1				1		0	0	下肢に病変あり (骨膜炎)	1
09号墓	厨子墓486		1		1						1	1		2
09号墓	厨子墓479	1	1		2						0	0		2
09号墓	厨子墓458	1			1			1			1	1		2
12号墓	墓室内一括341				0						0	0	骨片のため詳細不明	0
12号墓	墓室内一括395			1	1						0	0		1
12号墓	墓室内一括396				0						0	0	骨片のため詳細不明	0
13号墓西	厨子墓261				1						1	1		1
13号墓西	厨子墓482	1			1						0	0	骨片のため詳細不明	1
13号墓西	厨子墓441		1		1						0	0		1
13号墓西	厨子墓465				1						0	0	ほとんど骨片 (歯は1体分)	1
13号墓西	墓室内一括398	1	1		2						0	0		2
13号墓東	墓室内流入土262			1	1						1	1		2
13号墓東	厨子墓473	1	1		2						0	0	妊娠痕あり	2
13号墓東	厨子墓464		1		1						0	0	左上胸骨骨折	1
14号墓	墓室内流入土400			1	1						0	0		1

第Ⅲ-6-2表 推定被葬者数2

墓No.	出土地		成人				未成人				備考	合計			
	検出情報		男性	女性	不明	計	若年	小児	幼児	乳児			不明	計	
	墓室内	流入土													
15号墓	墓室内	434		1		1						0			1
19号墓	墓室内	流入土	402		1							0			1
20号墓	厨子墓	476	1	1		2						0			2
22号墓	厨子墓	446	1	1		2						0		♀脛骨、骨端未愈合	2
22号墓	墓室内	流入土	453		1	1						0			1
24号墓	厨子墓	442	1			1	1					1			2
26号墓	墓室内	流入土	319			0						0		骨片のため詳細不明	0
27号墓	なし			1		1						0			1
28号墓	墓室内	流入土	389	1		1						0			1
30号墓	厨子墓	450	1			1						0			1
31号墓	厨子墓	384			1	1						0			1
31号墓	一次葬			1		1						0		妊娠痕あり 推定身長141.3cm (大腿骨から)	1
31号墓	床直上	406		1		1						0			1
32号墓	厨子墓	461	1	1		2	1					1			3
32号墓	厨子墓	463	1	1		2	1					1			3
34号墓	厨子墓	444		1		1						0			1
34号墓	厨子墓	462	1	1		2						0			2
34号墓	厨子墓	478		1		1						0			1
36号墓	墓底1層	251		1		1						0		歯のみ	1
38~40号墓	北側土手II層	266				0			1			1			1
38号墓	厨子墓	470	1			1						0			1
38号墓	厨子墓	447	1	1		2						0			2
38号墓	厨子墓	485	1	1		2						0			2

第Ⅲ - 6-3表 推定被葬者数3

墓No.	出土地		成人				未成人				備考	合計		
	検出情報		男性	女性	不明	計	若年	小児	幼児	乳児			不明	計
	墓No.	検出情報												
39号墓	厨子甕467		1			1						0		1
40号墓	厨子甕469		1			1						0		1
43号墓	厨子甕487		1			1						0		1
46号墓	厨子甕435			1		1						0		1
47号墓	墓室内床直上256			1		1						0	骨片のため詳細不明	1
47号墓	厨子甕474			1		1						0		1
48号墓	墓室外1層131			1		1						0		1
48号墓	厨子甕466	1				1						0		1
49号墓	厨子甕480		1			1						0	妊娠痕あり	1
49号墓	厨子甕475			1		1						0		1
50号墓	墓室内表採258					0						0	骨片のため詳細不明	0
53号墓	厨子甕460		1	1		2		1				1		3
63号墓	厨子甕451					0	1					1		1
63号墓	厨子甕443		2			2						0		2
63号墓	厨子甕459		1	1		2						0		2
63号墓	厨子甕481		1	1		2						0		2
64号墓	厨子甕452			1		1						0		1
66号墓	墓室内床直上255			1		1		1		1	1	3		4
66号墓	墓室内流入土268			1		1						0		1
66号墓	墓室内床直上383		1			1		1				1		2
66号墓	厨子甕440		1			1		1				1		2
66号墓	厨子甕454		1			1						0	(20才前後)	1
66号墓	厨子甕455		1			1						0		1

第Ⅲ - 6-4 表 推定被葬者数 4

墓No.	出土地		成人				未成人					備考	合計
	男性	女性	計	不明	若年	小児	幼児	乳児	不明	計			
											検出情報		
67号墓		1	1							0	老年/下肢に病変あり		
67号墓			0							0	骨片のため詳細不明	0	
67号墓	2	1	3							0		3	
67号墓			0				1			1	乳児1体分あり	1	
67号墓	1		1							0		1	
67号墓	1	1	2							0		2	
67号墓	1		1							0		1	
67号墓			0				1			1		1	
69号墓	1		1							0	老年	1	
70号墓			1	1				1	1	2		3	
70号墓	1	1	2							0	経骨左病変あり	2	
74号墓	1	1	2							0		2	
74号墓	1		1							0		1	
74号墓	1		1							0		1	
不明			0				1			1		1	
計	31	41	91	19	2	3	10	6	4	25		116	

第Ⅳ章 結語

前章まで野嵩上後原古墓群の調査成果について述べてきた。当該古墓群は、古くから野嵩地域の墓域として知られており、近年の公園整備等に係る開発により、段階的な墓の移転に伴う個別の調査は実施されてきた（宜野湾市教育委員会 2011、2017）。しかし、これまで当該古墓群において広い範囲をまとめて調査することはなかったため、今回の調査により一部ではあるものの古墓群の詳細が把握された。

今回の調査対象となった古墓の多くは、遺跡地が所在する琉球石灰岩丘陵の斜面地を掘り込んで造られた掘込墓（フィンチャー）であった。特に中腹に造られた古墓の中には、比較的広めの墓室や墓庭を有する墓も見受けられたが、ほとんどの古墓は小規模の墓室が隣接して連なるような配置となっており、庭開いのない状態となっていた。庭開いを設けない理由としてはスペース的な問題が大きくなり、1基の墓に対する庭面積が確保し難い状況であったと考えられる。また、丘陵という地形を有効活用するため段状に墓を造ったことが想定されるが、造墓の際に墓庭だけでなく墓道も確保する必要があったものと思われる。しかし、墓庭と墓道の分のスペースの余裕がなかったことから、庭開いを設けないことで墓室の前面を墓道としても利用していたことが考えられる。この観点から考えた場合、墓庭を持つ比較的大きめの古墓は、早い段階で当該地に墓を造ることでスペース的な制約をさほど気にする必要がなかった可能性が推察される。

遺物については多数の出土品があったが、特に注目されるのが中国産褐陶器の出土である。褐陶器は34号墓をはじめとする約8カ所で出土しているが、その多くは破片によるものであり、完形を窺える資料は得られていない。しかし、中には比較的残存状態の良い資料も得られており、そのほとんどが壺形となることから、当該古墓群で得られる褐陶器は概ね壺形となり得る可能性が考えられる。壺形の褐陶器が確認される要因としては、厨子の代用として持ち込まれた転用品であったことが想定される。また、今回の調査では針の束と思われる鉄製品が確認された。針は6～7本が束になっている状況であったが、錆とともに布と思われる附着物も認められたことから、針を束ねて被葬者への副葬品としたことが推測される。事実、本市における民俗事例で、針は死後の世界のお金だとする伝承があり、針7本ずつを対にして被葬者の衿に刺す行為がなされていた（宜野湾市史編集委員会編 1985）。また、布目の附着する資料は銭貨でも見られた。布目痕の見られる銭貨も針と同様に、副葬品として「チンダンブル」と称される三角状の袋に納めて被葬者へ添えられたようである（宜野湾市史編集委員会編 1985）。確認された資料は、民俗事例との整合性が概ねとれているものと思われる。

被葬者については、少なくとも116人分の人骨を確認した。そのうち、未成人は全体の約21.6%にとどまった。成人の被葬者と比べてだいぶ少ない割合となる。未成人には乳児や幼児なども含まれるため、脆い骨が長い年月で風化する可能性も考えられるが、骨が丈夫になる小児や若年の被葬者までもが残存しないということから、未成人の被葬者は成人の被葬者が安置される本墓とは別の場所に葬られたことが想定される。仮に未成人の被葬地が他にあった場合、その場所の検証が必要になるとともに、当該古墓群において成人の被葬者とともに確認された未成人被葬者が葬られた要因も併せて検討する必要がある。

今回、野嵩上後原古墓群の緊急発掘調査及び資料整理を経て報告する機会を得た。当該古墓群だけに限らず、市内における様々な遺跡の現状変更が進んでいる。中には無断で遺跡の所在地が改変される事案も見られ、文化財の保護・活用にむけた巡回作業及び文化財情報図の定期更新とその周知をより徹底する必要性を痛感した。また、各種開発に伴う緊急調査に対する効率的・効果的手法についても今後の課題として、新たな調査手法を検討していきたい。

参考・引用文献

- 上江洲均 1982『沖縄の暮らしと民具』慶友社
- 浦添市教育委員会 1999『伊祖入め御拝領墓の厨子襖と被葬者』（浦添市文化財調査研究報告書）
- 浦添市教育委員会 2006『比嘉門中墓の家族史／比嘉門中墓の調査概要』（宜野湾市文化財調査研究報告書）
- 河名俊男 1988『琉球列島の地形』沖縄新星図書出版
- 宜野湾市教育委員会編 1989『土に埋もれた宜野湾』（宜野湾市文化財調査報告書第 10 集）
- 宜野湾市教育委員会編 1996『野嵩ウガンヌカタ遺跡』（宜野湾市文化財調査報告書第 23 集）
- 宜野湾市教育委員会 2008『宇地泊西原丘陵古墓群』（宜野湾市文化財調査報告書第 42 集）
- 宜野湾市教育委員会 2011『市内埋蔵文化財発掘調査報告書 2』（宜野湾市文化財調査報告書第 47 集）
- 宜野湾市教育委員会 2012『ぎのわんの地名 - 内陸部編 -』（市民民俗芸能調査報告書）
- 宜野湾市教育委員会 2015『重要文化財保存整備基本計画更新業務 [Ⅲ] 報告書』（平成 26 年度 沖縄振興特別推進交付金活用事業）
- 宜野湾市教育委員会 2017『市内埋蔵文化財発掘調査報告書 3』（宜野湾市文化財調査報告書第 53 集）
- 宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史』第四巻資料編三 宜野湾市
- 宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史』第五巻資料編四 宜野湾市
- 宜野湾市史編集委員会編 2000『宜野湾市史』第九巻資料編八 宜野湾市
- 鈴木 尚 1975「沖縄に於ける洪積世人類の発見」『人類学雑誌』83 第 2 号 日本人類学会
- 高宮廣衛・金武正紀・鈴木正男 1975「那覇山下町洞穴発掘経過報告」『人類学雑誌』83 第 2 号 日本人類学会

報告書抄録

ふりがな	のだけういーくしぼるこぼぐん							
書	籍 野嵩上後原古墓群							
副書名	平成26年度 野嵩第一公園整備事業に伴う緊急発掘調査							
巻次	—							
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第54集							
編著者名	長濱 健起、池原 悠貴							
発行機関	宜野湾市教育委員会							
所在地	郵便番号901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号 TEL098-893-4430							
発行年月日	2017（平成29）年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野嵩上後原古墓群	沖縄県 宜野湾市 字 野嵩 小字上後原	472051	010	26° 17′ 17.5″	127° 47′ 3.4″	20141215 ? 20150320	約2,000㎡	野嵩第一公園整備 事業に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
野嵩上後原古墓群	墓	近世～近現代		掘込墓等		厨子（蔵骨器）、沖縄産 陶器、本土産陶磁器、中 国産陶磁器、キセル、 簪、銭貨等		今回の調査によ り、50基余の古墓 を確認。
要約	<p>本報告書は野嵩第一公園整備事業に伴い、平成26年度に実施した周知の埋蔵文化財である「野嵩上後原古墓群」における緊急発掘調査の成果をまとめたものである。今回の調査によって、当該地に所在する古墓の多くが掘込墓の形態で残存しており、亀甲墓などの分類に該当する古墓がなかったことが把握された。また、遺物については、厨子などが目立つなか中国産褐釉陶器の壺、いわゆる大銭といわれる大型の銭貨「端平通寶」などが出土し、外国産の遺物が副葬されることも確認した。また、針の束もみとめられるなど、民俗事例との整合性も概ねとれたものとする。被葬者については、未成人に比して成人の割合が圧倒的に多く、野嵩地域における未成人被葬者の葬送法の違いが認められた。今後、野嵩地域とその墓域との関係を考えるうえで貴重な資料を得ることができた。</p>							

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行者）の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

宜野湾市文化財調査報告書 第54集

野嵩上後原古墓群

平成26年度 野嵩第一公園整備事業に伴う緊急発掘調査

発行年 2017(平成29)年2月28日

編集
発行 沖縄県宜野湾市教育委員会

住所 〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号
TEL. 098-893-4430

印刷 有限会社 大創
TEL. 098-892-8287